国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

江戸名所図会

九

124
20
114

三丙

東京圖書館

| 和書門 | 地理類 | 別礼函 | 六架 | 二〇號 | 二〇冊 |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |

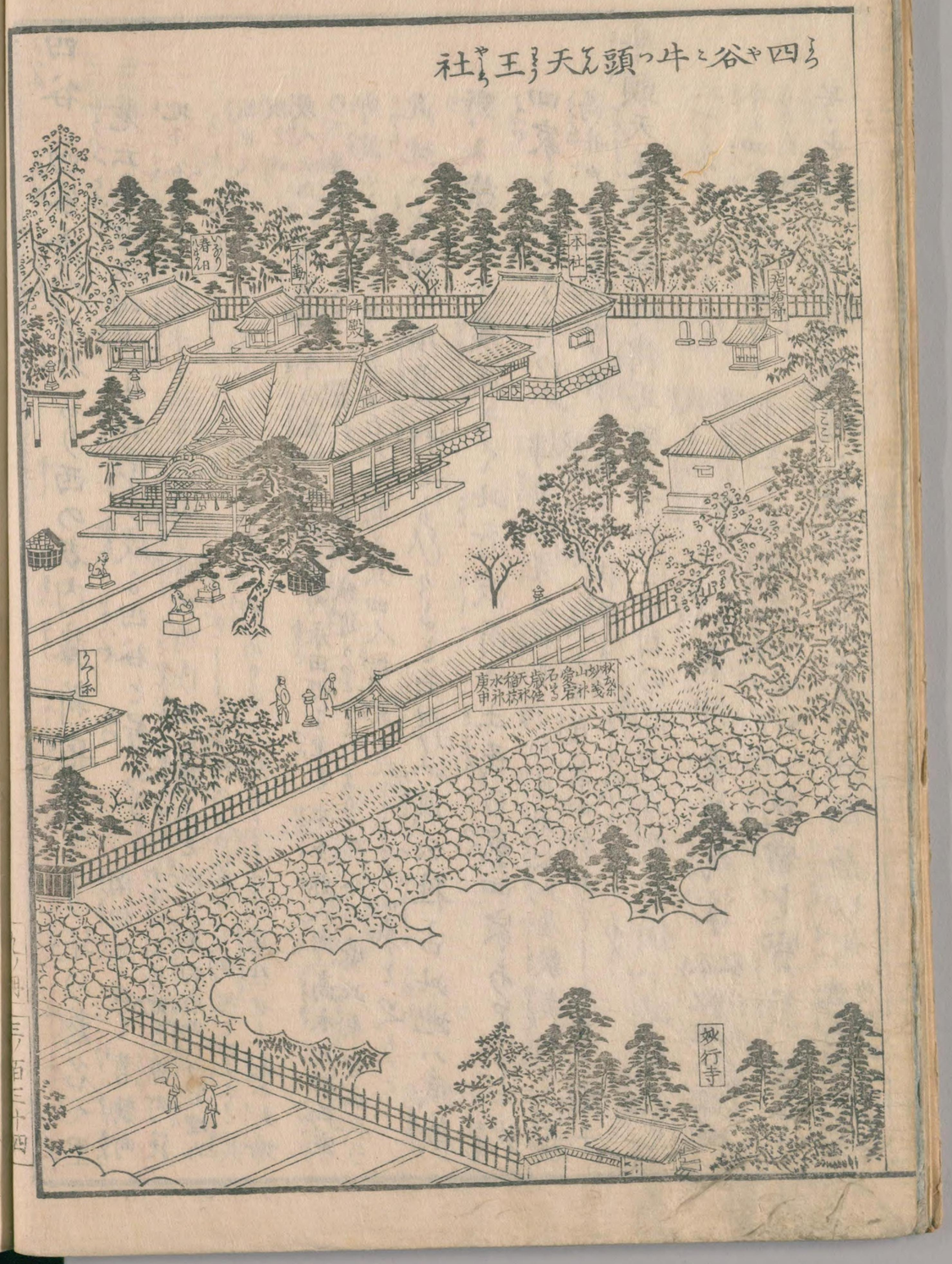
国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

四谷　四谷御門の外より西の方内藤新宿のあたり迄の惣名之里
老云此地の四方に谷あり故に四谷と号くると
南向亭云く　背麴町
六七丁目の地と塩町に
地に谷有しが寛永十三年外廓営造の時御堀の揚土を以て東西の両谷を埋め
たる故に平地となりしなと旧名はうしなはしく塩町の入口を今も坂町と字する其
故也又古へ坂にて有りし頃は民家一軒ありて夫婦くらしの人居住せしに夫婦
坂と呼しと云々
或人云此入國の頃は今の糀町両側番町永田町に至る本多弥八郎高木九助両家
の下屋敷として下し置れしか共御城近かるとしにより市谷の臺此原を永代の
御諚にて下しなふ表四百八十間に只四人指置れしにより四家といへりと
此地は永禄の頃霞村とよひ来ると云傳ふ或云往古此地は武蔵
野に續たし曠原にて此所彼所に土民の家四家あるし故
四家と云へり共いふ事跡合考に往古今の尾州公此屋敷表門の地及び
坂町其余二所共に民家四軒あるしにより鳴子
高井戸の方より四ツ家と称して往来にやすらひたりとあり
牛頭天王社　同所傳馬町一丁目二丁目の間の左側の横小路を入て
二丁目も西にあり故に俗字して此小路を天王横町といふ祭神素盞嗚尊本地佛は薬師弘法作紫の一
本に四谷の人家開けて神主は芝崎氏神田明神の神主也別當を寶藏院也
よりの産土神とすと
号も眞言宗中野宝仙寺末祭禮は毎歳六月十八日同所石切町傳馬町一丁目の横町を云

故柳原芳梵
東京圖書館
柳原家
林藏書

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用




国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

旅所へ神幸ありく廿一日帰輿を地主ハ稲荷明神にゝく
共よ此地の産土神と崇む行基大士の作ゝ
本地ハ十一面観音

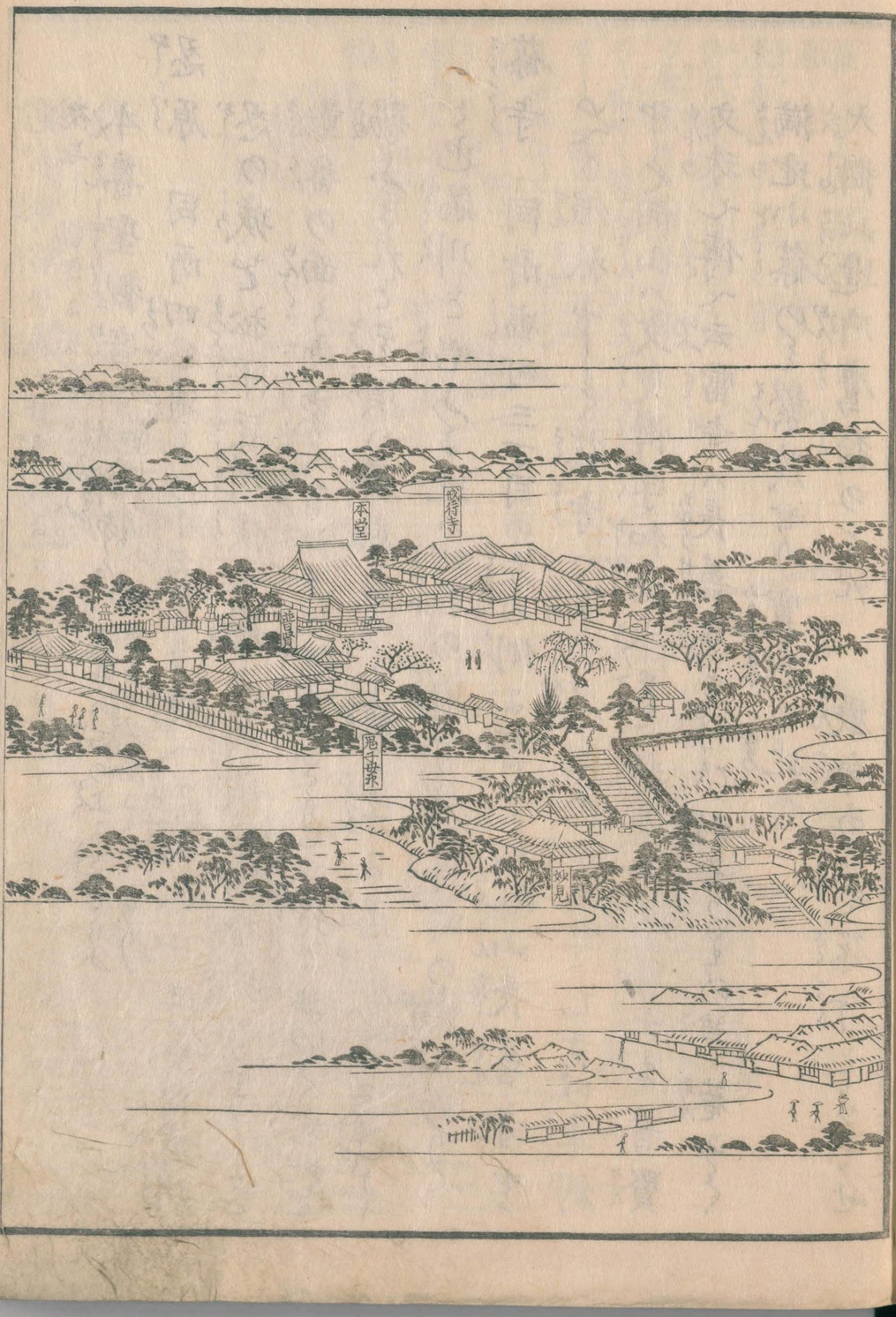
鬼子母神　同所坂の下南寺町日蓮宗日宗寺よ安置せり　當寺旧
水谷よ在て乗蓮寺と号也此地へうつされて後藤堂大学頭高次の室高見院梶町清
月日宗大姉の法号を採て山を高見と号ゝ寺を日宗と唱へ其家より寺院
再興あり本ぞ鬼子母神の像ハ日法上人の彫像なりと相伝ゝ
文永元年十月三日日蓮上人四十廿君を拜せんとゝ旧里安房
國小湊よ帰る母君悦の餘ぞ頻死を上人大ゐ歎て生活ぞ祈
念をせんとゝく先徒弟日法上人よ命ゝて此本ぞるを造らゝむ依
此本ぞるよ祈願ゝぞるよふ験あり〻ゝ暁蘇生ゝるよ後寿を保
つ事四年あり鎌倉住人鐵田氏某此靈像を傳来せゝが本
ぞるの靈ゐよりく享保十三年當寺よ安ゝ奉ぞるとぞ
刻典山戒行寺　同所南よ隣る日蓮宗ゆゝく延山よ属せり
寛永の頃迄ハ粧町一丁目の御堀端よありく常唱題目
修行の庵室なりしろ近隣宮重氏庵主と共よ力を合せく
遂よ一寺とぞ當寺の日貞開山日悦上人の徒弟ゝ寛保中八十余歳當寺ハ明
斎ろ孫ゆく延山日悦上人の徒弟ゝ寛保中八十余歳當寺ハ明
暦よ至ぞ此地よ迁ぞる總門の額よ妙典山と書せゝぞ朝鮮
國李彦の書ゝ此所の坂をぞ戒行寺坂又其下の谷を戒行
寺谷と唱へくり

分身鬼子母神　寺中圓立院ゆ安置ぞ永田安節とゝ
爰よ略しゝ記さず

汐干観世音菩薩　同所南寺町戒行寺の裏の坂口真言宗
錦敬山真成院よありぞ此本ぞるぞ越後國村上義清う守佛ゆ
ゝく其未流村上兵部入道道楽斎大坂御陣の時上杉
景勝よ従ひ奥州米澤より彼地よ趣く後江戸よ帰くぞ
當寺よ収むるとゝゝぞ塩踏観世音とも号く依く村上肥後守
頼清常よ崇信ゝぞ後堂宇を造ぞ安置ぞ大坂陣のゝゝ村上

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

# 日宗寺 戒行寺 汐干観音



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

覚玄斎當寺第三世看心に
授与し當寺に安すといふ
本尊聖観音作者詳ならず一尺斗の石の上に立せるゆゑ
此墓石潮の盈虚にハ必湿ることなり

忍原　同所四谷通りの小名なり傳へ云寛永十年癸酉武州
忍の城を松平豆州侯に賜ふ其頃ハ御番城なりしかハ
勤番の面々御家人を江戸へ召帰さるゝ此地に於いて宅地を
賜ふされと其頃ハ廣原なりし故に字に忍原とも呼し
と也忍川と唱ふる地ハ四谷の通り傳馬町の西にあり

篠寺　同所塩町三丁目の左の側に有る四谷山長善寺にて
とゝる禪林にして篠寺ハ其異名也天正三年乙亥の草創
にして開山ハ文叟憐学和尚本尊ハ釋迦如来脇士ハ普賢
文珠之傳へ云當寺ハ長善庵と呼ひ形ちかるもの草庵にて
満地小篠のゝ繁茂せり寛永の比
大樹此邊御鷹狩のとき
嚴命ありて篠寺とよはせ

篠寺といふハ四谷塩町の
通り道より左の傍にあり
長善禪寺と号く昔
御放鷹の頃当寺いさゝか
の庵室にて満庭小篠
のゝ取せく繁茂
せしかハ篠寺と
よはせゐひしより
字とハなりぬる
となり御今も
堂前に方三尺
ばかりの小篠の
隈ありて
其燈を
永世に
標せり

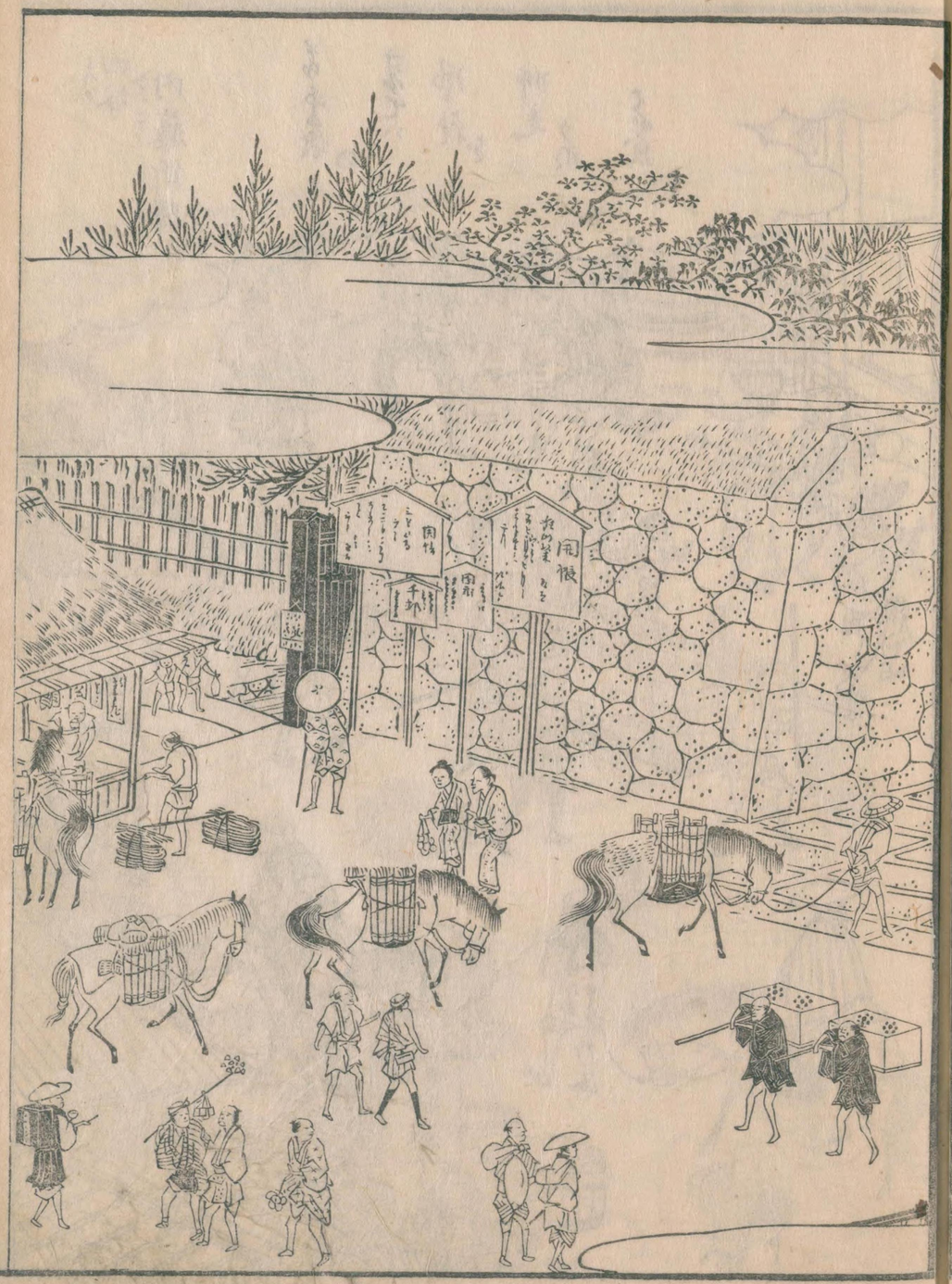
あひ此地を寺境にあふより後此名あり故に其證として今を
堂前に方三尺斗の地に小篠の隈ひを總門の額に笹寺と書
せしハ永平寺兼天和尚の筆なり

四谷大木戸 又大関戸に作る 甲州及ひ青梅への街道なり土俗云霞ヶ関
或ハ旭の関を云と是御入國の頃迄ハ此地の左右ハ谷にて
一筋道なり此關にて往還の人を糺問せらる近頃を江戸
より附出を駄賃馬の荷物送状なきを通さるしとなり
今も猶駄賃馬の荷鞍なきをハ江戸宿又ハ荷問屋等に手
形を出して通るを其遺風なり此故にやこれ番屋ハ町の
持なれを突棒指朕鋏にを飾置を是往古關のありし時の
遺風なるへん又同所西の方に往還の道を横ぎりて石橋に
下を右へ流るゝ小溝を櫻川とよへり

内藤新宿 甲州街道の官驛なり 此地ハ旧内藤家の弟宅の地なり
しか後町屋となる故に名とす
日本橋より高井土迄の行程凡四里餘にしてく人馬共に労
を依て元祿の頃此地の土人 官府に訴へて新に驛舍を取立る
故に新宿の名有り然るといへた故有りて享保の始廃亡せしか
又明和九年壬辰再ひ公許を得て驛舍を再興し今に繁
昌の地となれり 此所より高井戸へ一里廿五町あり 追分といふハ同所甲州街道八
王子通及ひ青梅にへの分道なれハなり

霞関山大宗寺 内藤新宿右側中程大木戸より二丁餘にに有り
浄土宗にして縁山に属を本尊ハ阿弥陀如来にして惠心僧都の
作開山念誉故心学玄和尚と号昔ハ草庵なり
しを寛永の頃内藤大和守重頼此地を賜ひし時此地に
住る道心者あるしに重頼若干の地を与へらるしか廣豁なるを
以て大宗なりと云しかハ重頼とりあへをさあらんにハ寺号を大宗と
付よとありしより号とすと當寺牌堂の本尊弥陀善逝の像ハ

国立国会図書館 タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

四谷
内藤新宿

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

鎌倉佛師の作なりといへり　齊藤伊勢守二親菩提の為と記してありとそ此齊藤といへるは代々鎌倉に仕へて齊藤禪門浄圓ゟ裔門の内に沙門正元坊ゟ造立せるなの銅像の地蔵なるあり

江戸六地蔵の第二番目なり

護本山天龍寺　同所追分より南の方甲州街道北左にあり

濟家の禪崖にして本尊千手観音開山ハ春屋和尚なり當寺

其先ハ遠州の天龍川の辺にありしを後江戸に迁し牛込に

ありしゟ天和三年癸亥二月十六日火災にかゝり竟に此地に引き

たり　延宝の江戸図に依て考ふるに今の牛込市徒歩町の西馬場のある地所旧跡にして今も元天竜寺前といへり　境内に地蔵

堂と観音堂有り又構の内に一里塚有り

鮫河橋　紀州公御中館の後西南の方坂の下を流る小溝に

架せるを云今此辺の惣名とあまり里諺に昔此地海につゝき

たりしゟハ鮫のひかりしゆゑに名とせといへり証とするにたらん

或人云く天和二年公家の所記録に上一木村鮫ゟ橋とありと云々然時ハ此

辺も一木の内なりと申し又佐目河に作る千駄ヶ谷寂光寺鐘の銘に鮫ゟ

村ともあり

鳥の跡

さびしさやなれしむとまおせばハ何ぶんをかくさめうれし　茂睡

永固山一行院　鮫河橋の西の方千日谷に在て浄土宗にして開山ハ源蓮社本誉利覚和尚といふ慶長年間草創を昔ハ僅の草庵なりしを永井家開基しく一宇の浄刹とを開山利覚和尚ハ則永井信濃守尚政に仕へ々るゝ剃染しく此地に庵をむすひ千日の間常行念佛をを結願の時千日不退轉の回向を勤む依て道俗群集せしより千日寺にて唱へ又此所を千日谷と呼ふとなり　紫の一本といふる冊子にさめう橋を渡す信濃原へ行谷を千日谷といふとあり永井家の屋敷あるべし　今ハ信濃町といひ又永井原とも云と云々

阿弥陀佛銅像　権太原浄家長禪寺境内に在り高さ五尺たりす佛像の脊に應永十四年丁亥八月廿五日と彫付てあり旧東本願寺の佛にて大坂の御城内にありしを寛永の頃江戸に移し當寺に安置せり

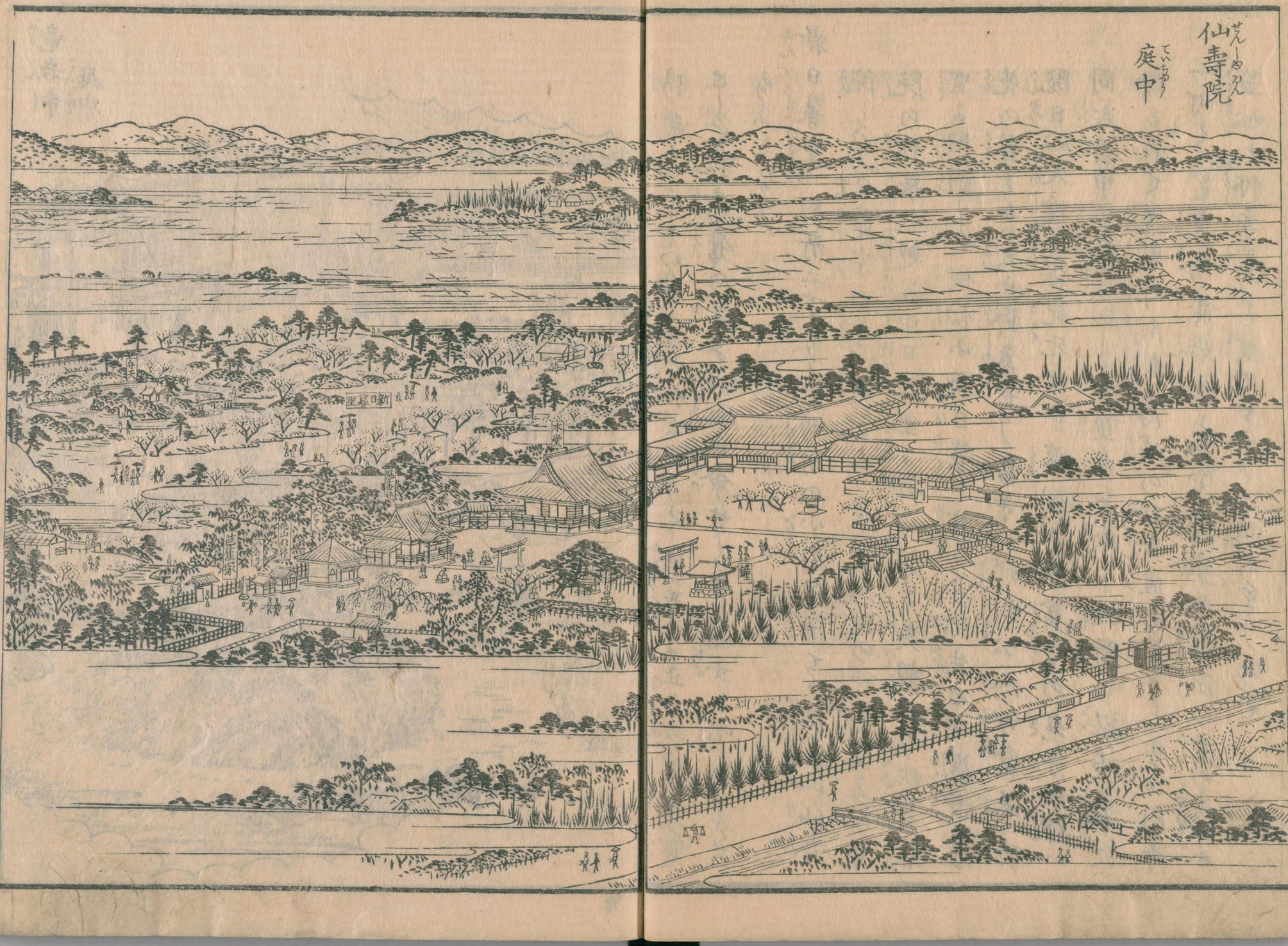
権太原長禪寺

芝千駄谷
大神宮
寂光寺

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

按に應永十四年ハ足利將軍義持の時世なり佛躯こゝかしこに穴あり疑ふ
吾妻堤　同所にあり往古の街道の餘波なりとて堤の形今も
僅に殘れり
太神宮　同所御焔硝倉の西の方に有り相傳ふ萬治年間
関東大に疫疾流行せ冨士の根方より神送りしく此地に
祭りぬ然に其神輿の中に太神宮の御祓有り依て此地
鎮護の為同所八幡宮の地に祠を建て是を勸請せ後此地に
遊女の松　同所西に隣る天台宗寂光寺の境地に有り
當寺昔ハ麴町の貝塚の地にありしが御城廓御造営の時此地に
開基ハ自證大僧都圓雄師なり始ハ日蓮宗なりしが元祿の頃天台宗に改む今の
相傳ふ此地ハ往古の奥州街道にして廣豁の原野なりしに
此松樹の鬱蒼として栄茂し遠く見え渡りしに霞の
松と号しが寛永の頃　大樹此地に御放鷹の時に鷹翦て
御氣色あしかりしが此松にありて御拳に止る故に御褒賞
として其御鷹の名を此松に命せられ遊女と唱へしぞ
あふとなり
新日暮里　同所二丁ばかり西南の小川を隔て法雲山仙寿
院といふ日蓮宗の寺に庭をしらよへり此辺の地勢をよひ寺
院の林泉の趣谷中日暮里に似て頗る美観なり故に日暮
里に相對して假初に新日暮と字せり弥生の頃爛慢なる
花の盛りにハ大に群集せり當寺ハ紀州公御母堂養珠
院日心大姉正保紀元甲申草創あり當寺の鬼子母神ハ
同大姉甲の延嶺にして靈尓を感し大野の辺に土中に
得られて後當寺開創落成の日安置あるしとなり同所
一町ばかり東南龍岩寺といへる濟家の禪宗の寺の庭中に
笠松と称するあり枝のまゝり三間あまりあり

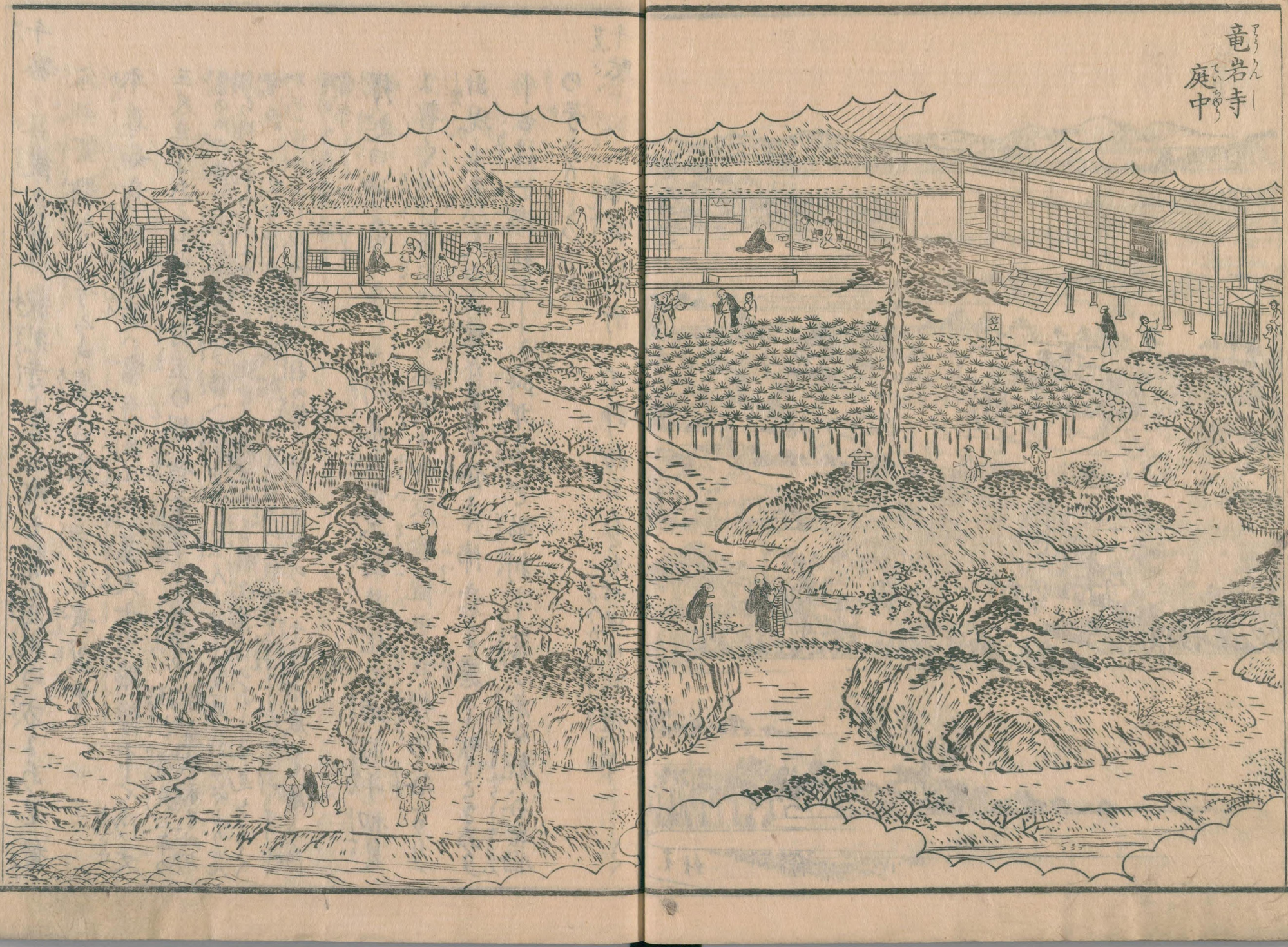
# 仙壽院庭中




国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

# 竜岩寺庭中



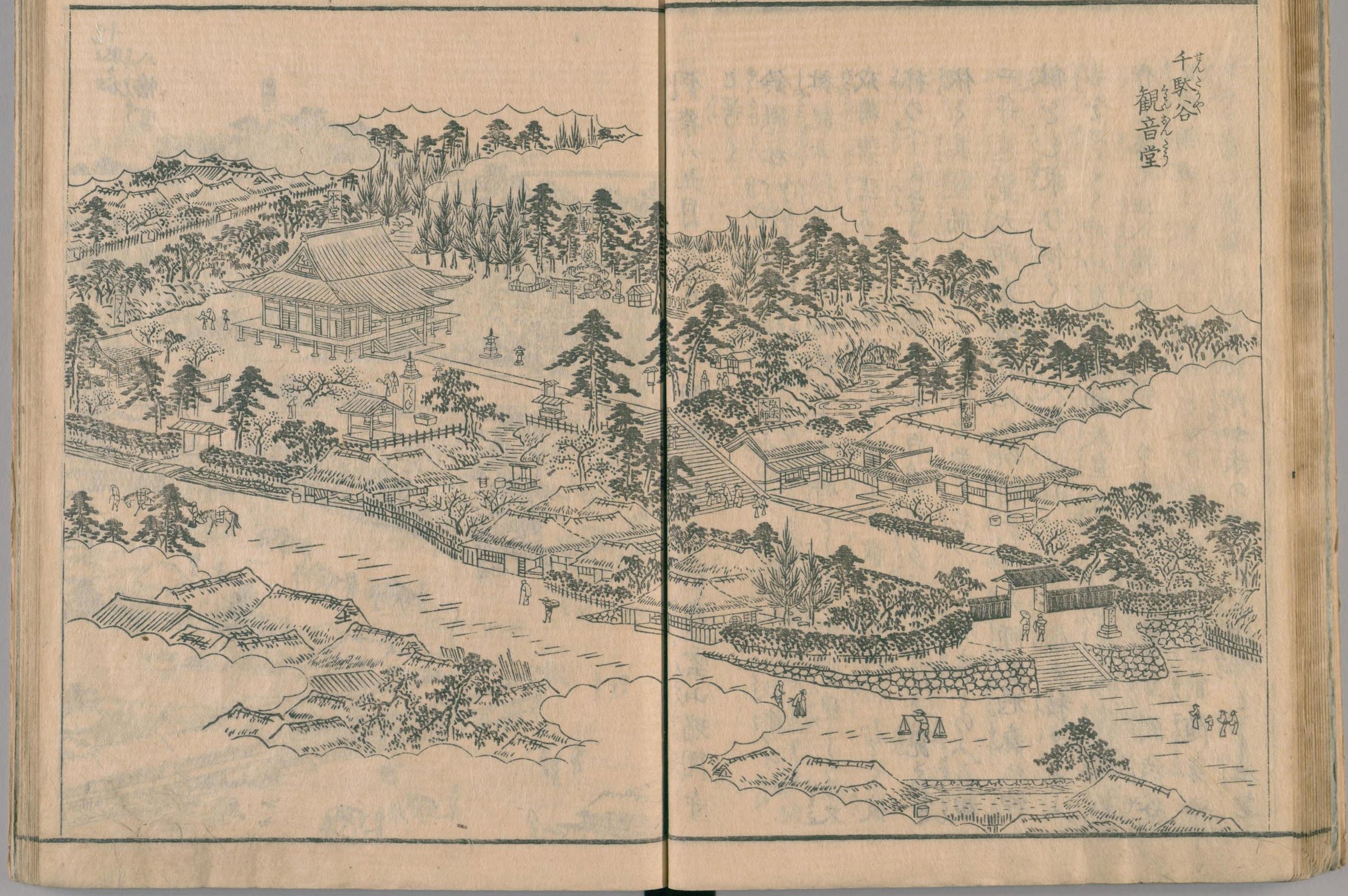

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

千駄ヶ谷観音堂　寂光寺より二町ばかり西北の方にあれば観
谷山聖輪寺と号ける真言宗の寺に安置せ
本尊如意輪観音ハ當寺開山行基大士の彫像にして御丈
三尺五寸あれば世俗目玉の観音と字しなる　往古慶長三年の春盗賊来れば此本
ゑの御双眼ハ精金なりと吹傳へ鑿とりて去んとせしか冥罰にやよりけん
自ら持ち和の刃に貫まてく死せり此地のある橋氏某目のあたり是をみて
驚歎し堂宇を再興す此あたに里民目玉の観音と字したてまつるよし
本ゑ縁起にはゆ菊岡沾涼翁の説に江戸寺院の中千有余歳を歴たる
そのこと浅草寺と
當寺へといへれば
縁起曰神亀二年乙丑行基大士東國遊化の頃同年初夏
に暫く此地に息ひ給ふ時に如意輪観世音傍の谷より
出現しなひ大士に霊尓あれば依て佛意に應しかしこにあり
し古株を佛材として此本ゑを彫刻しなる故に観谷聖輪
の号ありといへれば
千駄ヶ谷八幡宮　同所一丁許西にあれば此辺の惣鎮守にして

例祭ハ九月廿七日なり別當ハ真言宗高雲山瑞圓寺
と号く
鈴懸松　門前に松の老樹有れば寛永の頃　大樹此地に出放鷹の時
御鷹の鈴此松の枝にかゝれしとなり故に名とすと
社記云往昔此地深林の中に時として瑞雲現しける又
或時碧空より白氣降れて雲上に散せ村民怪むて彼
林の下に至るに忽然として白鳩数多西をさして飛されば
依て其霊瑞を称し小祠を営て名つけて鳩森といふ貞観
二年慈覚大師東國遊化の頃村民等大師に鳩森の神
躰を乞求む依て宇佐八幡宮城州鳩の嶺に移れるゆゑ
古をしひて神功皇后應神天皇春日明神等の尊躰を
作れ添て正八幡宮に崇めるゆゑ遥に後久寿年間渋谷
正俊領地に鎮座の御神なるを以て金王丸生前随身の
本ゑ恵心僧都の作の弥陀如来の像を本地佛とし社を

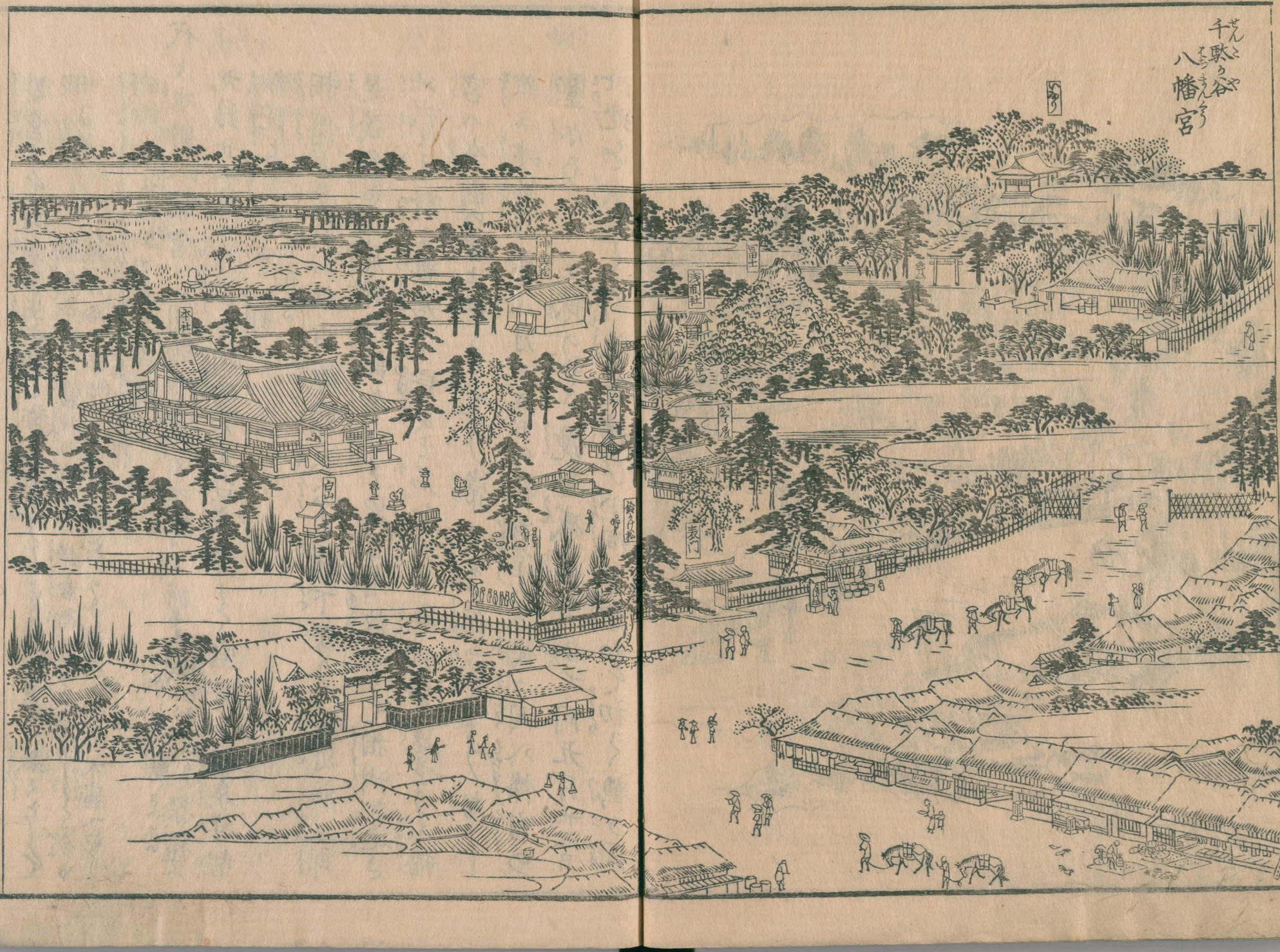
# 千駄谷観音堂




国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

# 千駄ヶ谷八幡宮




国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

造営して此地の生土神と称し奉りしより日よ新あり（南向亭云く當社の前路ハ鎌倉街道の旧蹤やしく今も北条家分限帳島津孫四郎所領の中よ千駄ケ谷の名有るとぞ山の原宿より此地をへて大窪へかゝり代々木野八幡宮 同西の方代々木野の此野も武蔵野の中なり祭禮ハ九月廿三日よ修行を別當ハ天台宗ゆゑしく宝珠山福泉寺智珍院と号せ古ハ知明と作る

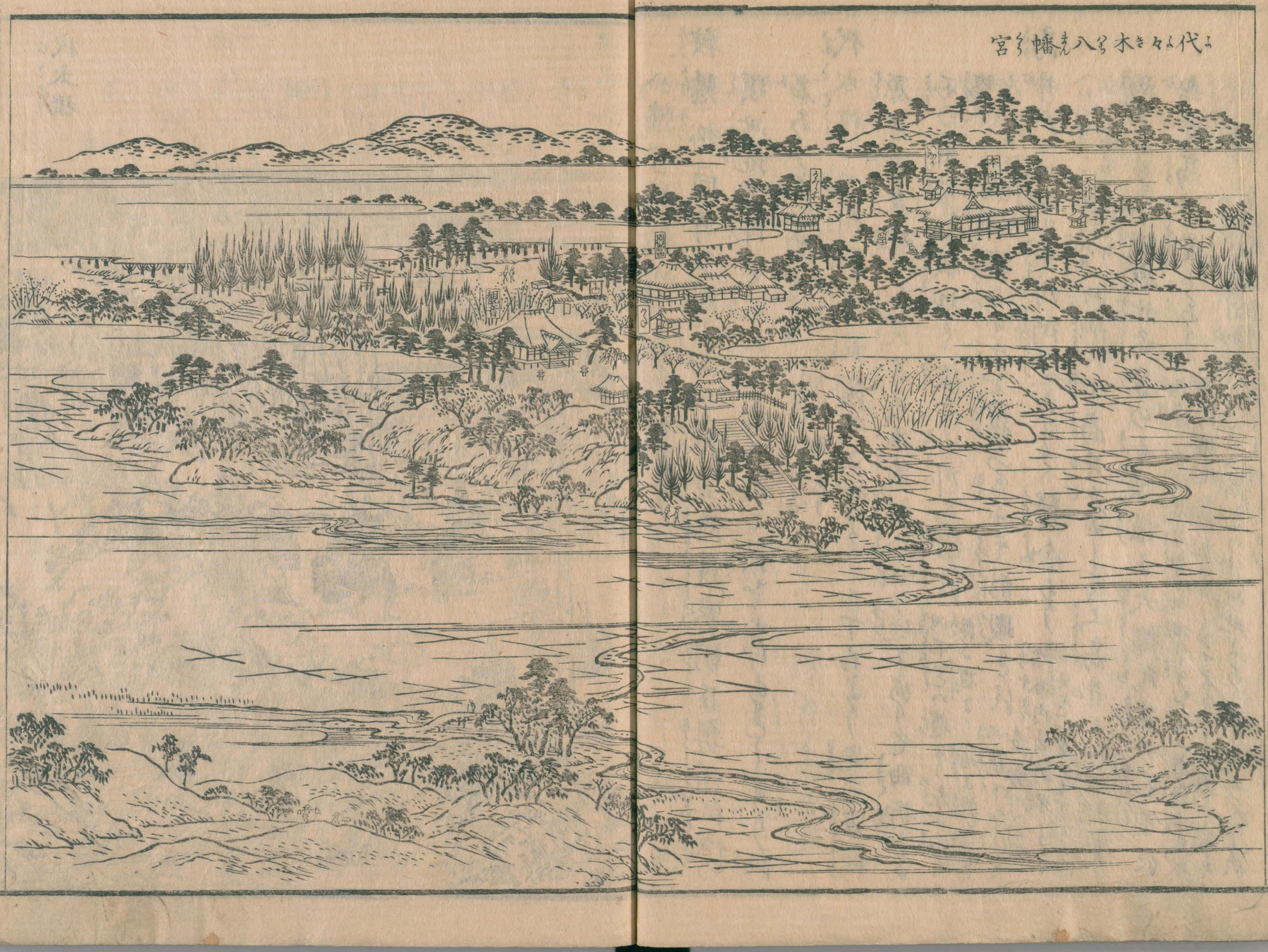
相傳ふ當社ハ往古源頼家公の簇下なりける近藤三郎是茂の家人荒井外記智明とものゝ此代々木野よ蟄居して宗支と名を改め年月を送りより八幡宮ハ本國の産土神なるよし信心怠らざるなり常よ然よ建暦二年八月十五日の夜夢中よ鶴ヶ岡八幡宮の霊示ありしく宝珠の如き鏡を感得せより依て同九月廿三日此地を求めしく荊棘を拂ひ小祠を営むで初しく鶴ヶ岡八幡宮を勧請しまつるとなり

鞍懸松 同所の岡よ在り傳へ云源義家朝臣奥州征伐の頃此地よ陣を取此松樹の枝よ鞍をかけられしより此名ありといふよ江戸鹿子よ出す

代太橋 甲州街道敷窪の立場より三丁あまり先の方松原赤堤泉廻り代太等の五箇村入合の辻よりして曲折せる水の道路を横切しく流る小川よ架せる橋下左右よ添て流る橋より右よ添て流る橋上よ土を覆ふて形顕はれ此下よ甲州街道ゆしく驛舎あり

高井戸 此所ハ下高井戸中高井戸上高井戸よ分る此西よあるを小田原北条家の分限帳よ大橋氏某の下領に無連高井堂とあり無連ハ垂仁高井田國雑記よ堀兼の井此地のものをいふ道興准后の堀兼の井ハ此地よありや今ハ至和寺ハ第四巻堀兼の井此地より西南の方二里一丁あり八王子道中分間延絵図よ此所ハ下高井戸より上高井戸ハ此所より西よあるを小田原北条家の分限帳よ大橋氏某の下領に無連高井堂とあり無連ハ垂仁高井田國雑記よ堀兼の井此地のものをいふ道興准后の堀兼の井ハ此地よありや今ハ至和寺ハ第四巻堀兼の井此地より西南の方一里北五丁上石原内藤新宿より三丁先の方松

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用




国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

鬼子母神 下高井戸の道清月山覚蔵寺といへる日蓮宗の寺に安置す鬼子母神の霊像ハ宗祖大士の作にして佛像の脊に建長五年癸丑八月八日日蓮刻之とあり

縁起曰文永八年九月十二日日蓮大士相州龍口にお(い)て誅に伏さんとせられし頃一人の老女ありて胡麻の餅を供養せり大士歓喜のあまり建長五年の夏始て妙法蓮花経の首題を唱へ始めたまひし時廣宣流布の初祈の為自彫造ありし法流守護の鬼子母神の霊像を彼老女に授らるしかるに家に此霊像を傳へし時に享保十八年癸丑五月此霊像俗家にありて法味に乏しきを以て出家の浄に贈るべき旨霊示あり依て當寺第十世の住侶日曜師鎌倉松葉谷妙法寺に在せし頃彼武左衛門此霊像を携へ来り来由を告て日曜師に附属せり然るに日曜師當寺の破壊を歎き寺院再興の為爰に移住せられし頃當寺へ遷しまゐらせしと云

布多里 今所謂布田邑是なり

此地ハ甲州街道にして上下と分れたり 布田或布多に作る此地布多天神社の御制札にも補陀の郷とあり 石原上下國領等を合て布田五宿と称ふ

武蔵國風土記曰多磨郡

爾布田或新田公穀三百七十二束三字田假粟

二百十三丸三字田

貢薇蕨諸草菜及禽魚等

亦布田川出鮎鮒鯽等云云

代太橋

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

和名類聚抄曰
武藏國　多磨郡　新田　尓布多云云

按に風土記に出る和の爾布田及ひ和名抄に載る和の新田共に此地のことを云なるへし後世上略して尓布多を布田とよりて唱ふるに又風土記に尓布田川の名あれとも今しるへからに

万葉

多麻河泊尓左良須氐豆久利佐良左良尓奈仁
曾許能兒乃巳許太可奈之伎

家集

手作やさらに垣根の朝霧をつらぬきとめぬ玉河の里　定家

按に万葉集多磨を多麻に作る布田も又古ハ布多とす往古麻の布を多く産せしにより假字にハあれと意を含ミて麻にも作るかゝらんに當國の府ハ此地より西南にひらく遠からに尤しく毎國朝廷へ調布を貢せしより國史等に詳なり風土記多麻川の条下に里人調布を作り内蔵寮に納とあり然るに此國より貢せる処の調布ハ當國に産せるものを集めて此川辺ゆゑ晒しきりして府に携へ國司の洋へ出せしなるへし依多麻川の水流を考ふるに府中の辺より水源ハ河流狹くしてく巨石多く布田より下流ハ漸海に近きゆゑ潮の盈虛ありて調布に便ならしめたる此布田の辺のこゝ河流の廣狹水流の滔々たる実に布をさらしよろしと思ひる故に合せ考ふるに此辺ハ此辺一ツ実跡なるへからん又云毎歳三月の頃より七八月に至り此辺の童兒等唄ひ躍り歩行するあり其形勢及ひ唄ひ物の言葉にも調布のことをもつとす唄に云く

布多
天神社

此川の流の末（何処迄と）ハとゝろそれ布を流さハ海まで

又云 あのよハヤ紅屋の子ヤレのもかもさ〳〵ぬれ袖をさ〳〵しぼりもさ〳〵ずも干さぬおろ〳〵ぬるゝ

又云 深草の鶉こ二羽まひ日ひもち通ひやる山越て

てるか川水の用さしあけてとゝろ〳〵

此唄ひものゝ古を知りたる人あらバ足すり附て云此地より西有中までその間よ深屋邑と称する地あり是も古俗うたの家多くおりく調布を深草と号し此名あるよし東鑑建久六年七月廿八日の条下よ武蔵國深草郷当りて安房上野局よ何分ら糸所別当のハ近瀬局これとをるとあるも此辺のことをいふなり又云和名抄白絁布を天都久利乃沼乃と訛す同書よ今按よ俗よ手作布の三字を用ゆると云く調布を和名抄よ豆岐の沼能とありく貢よまつ布のことをいふなり

布多天神社 上布多駅舎の辺より右の方四丁ばかりふあり別当ハ真言宗ゆ〳〵廣福山栄法寺と号し浅尾王禅寺よ属す 祭禮を隔年九月二十五日よ修ぶす當社祭神詳なら〳〵ず今菅神を相殿に勧請ゆ〳〵二座とゝ當社昔ハ多磨川の岸頭よありしゟ洪水の難よ罹るの後今の地へ迁すとぞ

延喜式神名記曰 武藏國多磨郡 布田天神社云云

虎拍神社 同所北の方十丁許を隔て佐須村あり 佐須の古當社の神社の南よあるゆゑの名なり呼ゝ今ハ社前よ古松二株叢生ゆゑ連綿と聳ゆ〳〵九月十三日を以て祭祀の辰とす

延喜式神名記曰 武藏國多磨郡

武藏國風土記曰 武藏國多磨郡狛江郷

虎拍神社 圭田七十三束

崇峻天皇二年己酉八月始祭事有之云云

延喜式神名記曰 武藏國多磨郡

虎拍神社云云 按ふ深大寺縁起よ満功上人の祖母の名の虎と祖父の住ゝし柏野の里の名とよありく虎拍の神社ありとハ是非をもつゝ柏の字の古ハ大抵从ひ拍よ作ゝ今ハ从ひ柏よ誤れるなり又當社の南よある耕田ハ古社領なりしとぞ今も宮田と称へ風土記よ挙る七十三束の圭田是なり

虎柏山祇園寺 同所三丁ばかり東の方よあり日光院と号す 天台宗深大寺よ属せり當寺ハ天平勝宝二年庚寅深大寺の満功上人開創まゝふの佛域なりとぞ本尊ゟふハ立像二尺許の弥陀

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

青渭社
虎狛社

如来の木佛を安置す 作者未詳 本堂の向拜に掲る所の虎柏山の三大字ハ筆者を志らず

藥師堂 本堂の前右の方にあり藥師佛ハ立像御長一尺たりなりく行基大士の彫造なりとしへる 佛龕の内に弘法大師の真跡の般若心経を収む 此堂宇二百有餘年たりて前にハ此地より東南の方三四十歩を隔てゝ耕田の中にありしとなり 今に古茱師堂と いふ地是なり 其頃屢賊の為に佛器の類ひを奪はれしかハ終に祇園寺の境内に迁せしとなり 今茱師堂より一丁程南に茱師堂面と字して一反六畝たりの除地あり鎌倉時世より前に附せる所なるよし土人いひ傳へたり

狛江入道旧舘地 祇園寺より艮の方六七町を隔てゝ二百歩あまりの岡なり空堀の形なと嚴然として残れり此地に入道崇むる所の稲荷の小祠あり土人里の稲荷と称す祠前樫の老樹一株六圍にあまるもの存せり 東鑑に承元二年戊辰七月十五日 狛江入道増西悪黨五十余人を率ゐて武蔵國威光寺領内に乱入し田を刈狼籍に及ぶ由院主の僧圓海

訴出るといふことを挙たり刊本柏江に作るハ狛江を誤りたるものなるべし又云
こゝに狛江入道と云傳ふるも此増西のことをいふなるべし又同書に建久元年庚戌
十一月七日二品入落供奉の人名の内に駒江平四郎といふ名を注す
按に續日本後紀に仁明天皇の承和十一年甲子五月武蔵國多磨郡狛江
郷より節婦を出すことを載らるゝ刊本猪江に作るハ狛を誤れるなり
せり武蔵國風土記残編にも多磨郡の内に狛江郷といふ地名を出したり
和名類聚抄にも同し郡の郷名に狛江とありて古乃江と訓すされと此
地を今ハ佐須村と称ふ志るに多磨川の北宇奈根村に隣りて駒井邑と
呼ふ地あり恐らくは狛江の郷の轉訛ならん北条家分限帳に多波川の北
駒井本郷太田新六郎知乃の内にあり此不駒井の旧地なるべし

青渭神社　虎柏神社より北の方深大寺村の中にあり土人
此地を字して天神ヶ谷戸といふ祭神詳ならん世に
青波天神とも称せり相傳ふ古ハ社前に湖水ありし
青波の称ありと社前槻の老樹あり数百餘霜を経たる
ものなり

延喜式神名帳曰　武蔵國多磨郡
青渭神社云云
按に神名帳に青渭とあるを今本阿遠伊と訓す土人云古當社の前ハ湖
水満たるなり故に青波の称ありといふ今青波に作る阿遠葉と訓するハ
擾あるに似たり猶同巻青沼明神の条下と應照てしるべし

狛江入道
旧跡
祇園寺

青渭堤　青渭神社の辺あり古ハ青渭の湖水湛えしを後世堤を切開そ水を乾し耕田とあすとぞいへり故よ今此和彼和ふ六七歩或ハ十歩よあまれる塚のめぐりの残り存して草樹繁茂せるハ其堤の旧跡ありとぞ

浮岳山深大寺　昌楽院と号ク深大寺邑よあり此和も佐須村と云青ハ相野里と号せ大古ハ法相宗ありしを恵亮和尚以来天台宗よ改むれるハ宝冠の阿弥陀如来恵心僧都の作ありといふ当寺を福満童子の宿願ゆえりて天平五年癸酉よ草創せる和ハ日本年代配合抄よ白天平勝宝二年庚寅深大寺建立云云

佛域なり　四十七代　慶帝御宇和尚と恵心僧都と心をひとつゆして武蔵国深大寺ハ代々の帝勅願の地やんごとなき霊像なりしを慈恵大師最山よ於て自彫刻あむ灵跡永く此勲像を迂して関東の群生を化益せんとそ必暦二年己酉の春こゝ小安置あを尓来霊應ありて月毎の三日十八日よハ那業護摩供を修行あるうえ前よ市を立る

小勅願所と定られしより平城清和両朝も又勅願所と

なりひしとぞ云

元三大師堂　本堂の前左よ傍てあり寺記よ云應和四年慈恵大師降魔尊像　先の霊像と共よ最山より当寺よ迂座

五大尊石　大師堂の北の際清泉の中よ著土人旱魃の時此水よ祈雨あり

要石　同じ泉水の中島よ稲荷の宮の傍よあり昔此山崖あと崩れ落ん土人憂なりしよ武蔵國の鎮守氷川の神勅して此石を建て要石と号くと云

鐘楼　大師堂の後の峰の頂の寺主石念ずる処の鐘ハ近郷の人群参せり此日門

武蔵國多東郡深大寺

奉治鋳撞鐘　長四尺三寸口二尺三寸

右伏以當山蒲牢開基以来華更其數不一或雖有破裂而無声或雖討得有薄畧而不鳴爰貓素勤力廻命鳧氏遂鋳鴻鐘當知三宝垂感諸日弥明伽藍鎮静法輪常転更乞諸檀施主二世善願一切成就仍昭銘功

百千万劫滅罪生善

永和二年丙辰八月十五日

寺号深大山名浮岳

定期勿遁

令人正覚

大行事院主法印大和尚位守慧

別當前大僧正法印権少僧都辨運

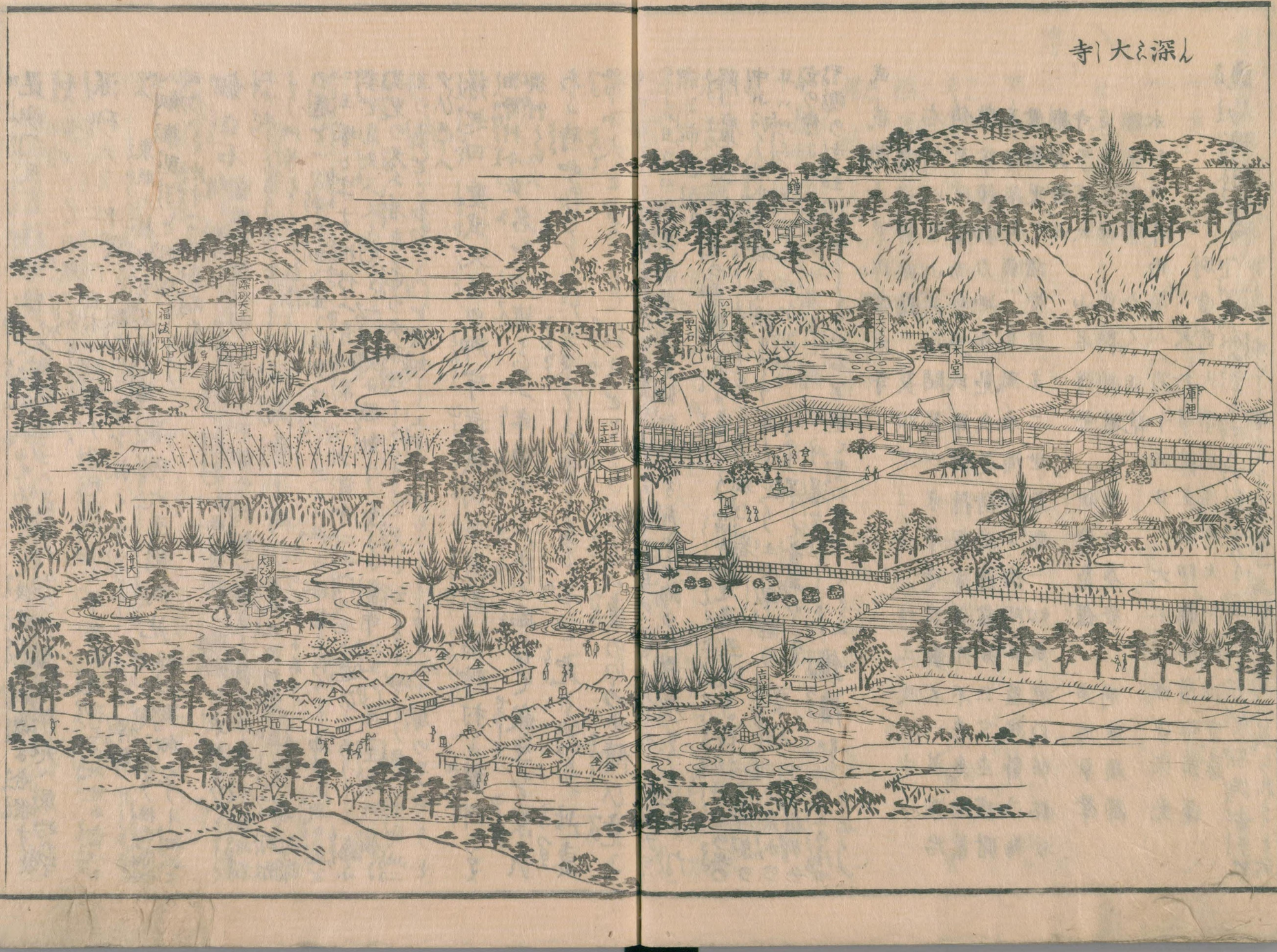
大工山城守宗光

新鋳鳧鐘　大工山城守宗光

驚起塵夢　声形卓犖

消除煩濁

亀島辨財天祠　祠前左の方の池の中島よあり縁起よ所謂福満童子を祭員て浚ふ満功上人祝天ふ崇られしと云

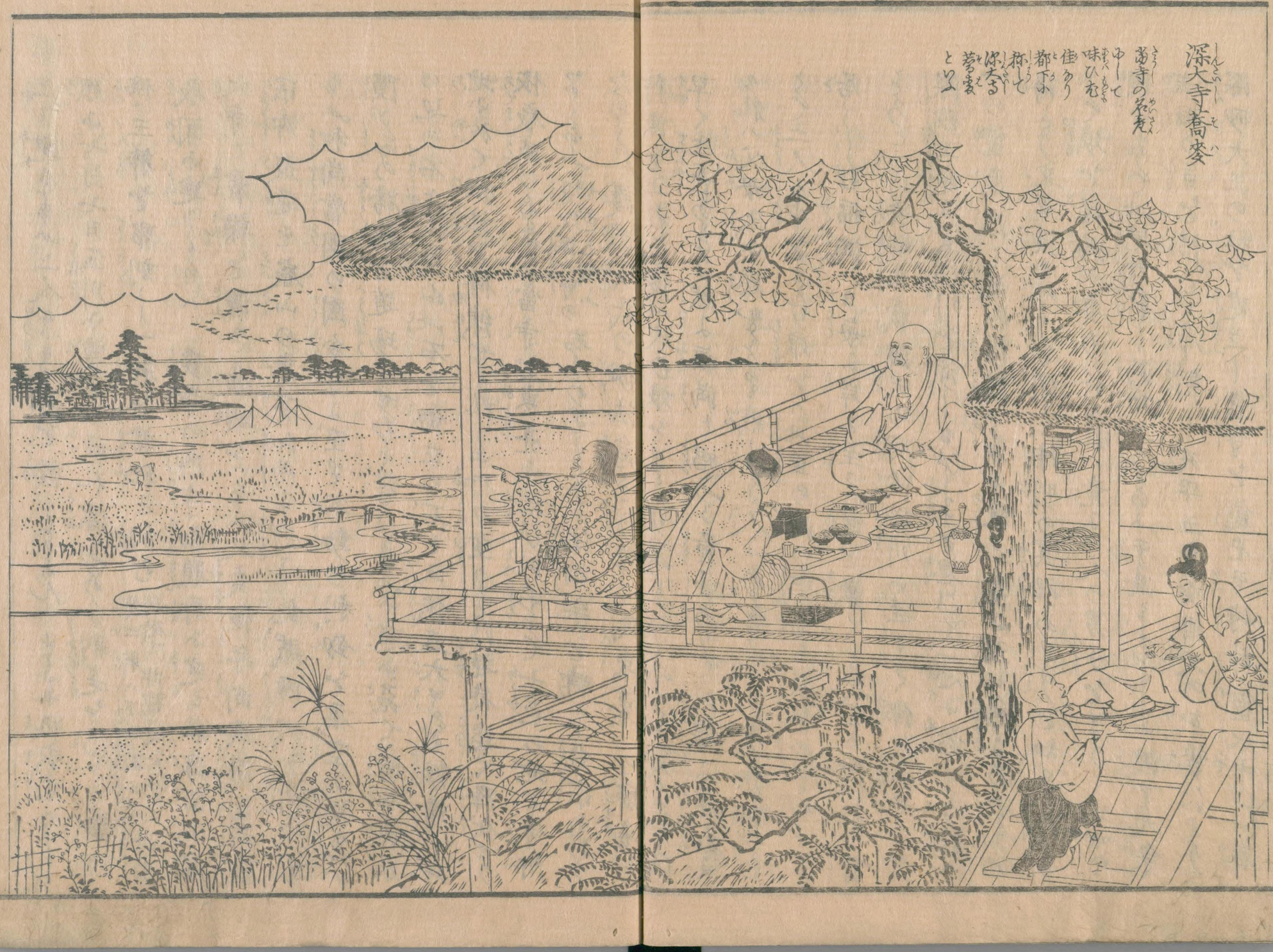



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

毘沙門天吉祥天社　昔ハ各別社なりしを後并て合祭すと
云伝ふ　池中一ツの霊石あり　福満童子ハ毘沙門天の化身吉祥天ハ象起か
深砂大王社　大門並木より相対す　縁起曰天平五年癸酉満功上人此地ニ當社を
営ミて深大の二字を採て寺号と一宇を草創
し往古深砂大王影向池　社の傍よりあり　往古深砂
大王影向ありし旧跡と
東照大権現宮及ひ八幡
権現を相殿とす
剱立石　洞　池のほとりにあり　往古恵亮和尚當國分寺より至り不動の利剱を虚空より投ふせ
當國の國分寺より至り不動の利剱を虚空より投ふせ
上ふ立しとの事ありしを此号ありと
縁起曰　聖武天皇の御宇武蔵國多磨郡柏野村より猟師あり
柏野村今佐名を右近とよひ年頃山ふかく入水ふ臨むて殺生を業とし
須村
の道を一丁ほと西へ登る坂を塔坂とよひ往古塔
二王塚と字す相伝ふ昔何某の一子當寺二王門の辺ふ遊ひて
ありしに一人の童子来りて其児を呑ふ
姿を見失ひ其児の着もの衣服斗
王の傍ふ
ありしを破却し土中ふ埋やりしより二王塚の号あり
ある時ふ
常ふ夫を殺生をとゝむ右近ハ妻のいつふ随ひ竟ふ
と云ふ
狩漁を止む平後一人の娘をもふけ
早く生長ありて然ふ福満と唱ふる童子ありて此娘ふ逢初ふ
それハ父母大ふ怒かりしを賤しき人ふあらせんより本意ある
とて二人ふ中をさけ娘をハ此里の池の中島ふ家を営みかこふ
居らしむ福満ハ日毎ふ岸ふ至りて是を歎くこのころもかくて昔
ふろこしの玄奘三蔵渡天の時流砂川ふ至りて佛を念せしふ
深砂王現ありて一心ふ念しられハ
一の霊亀浮ミ出ぬ福満ハ甲ふ乗て島ふ至り娘ふあふ事を
得しかり父母後ふ此事を聞て神明の冥助ありてふ
して娘を福満ふ妻あらせられハ竟ふ一人の男子をもふけ父母の
頼ゆゑて此児出家して満功上人とのふ渡ふ大乗
法相の旨を伝へて帰朝し天平五年癸酉父の本誓ふより
深砂大王の社を建立し當寺を創ふ時神霊水中ふ岩

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

# 深大寺蕎麦



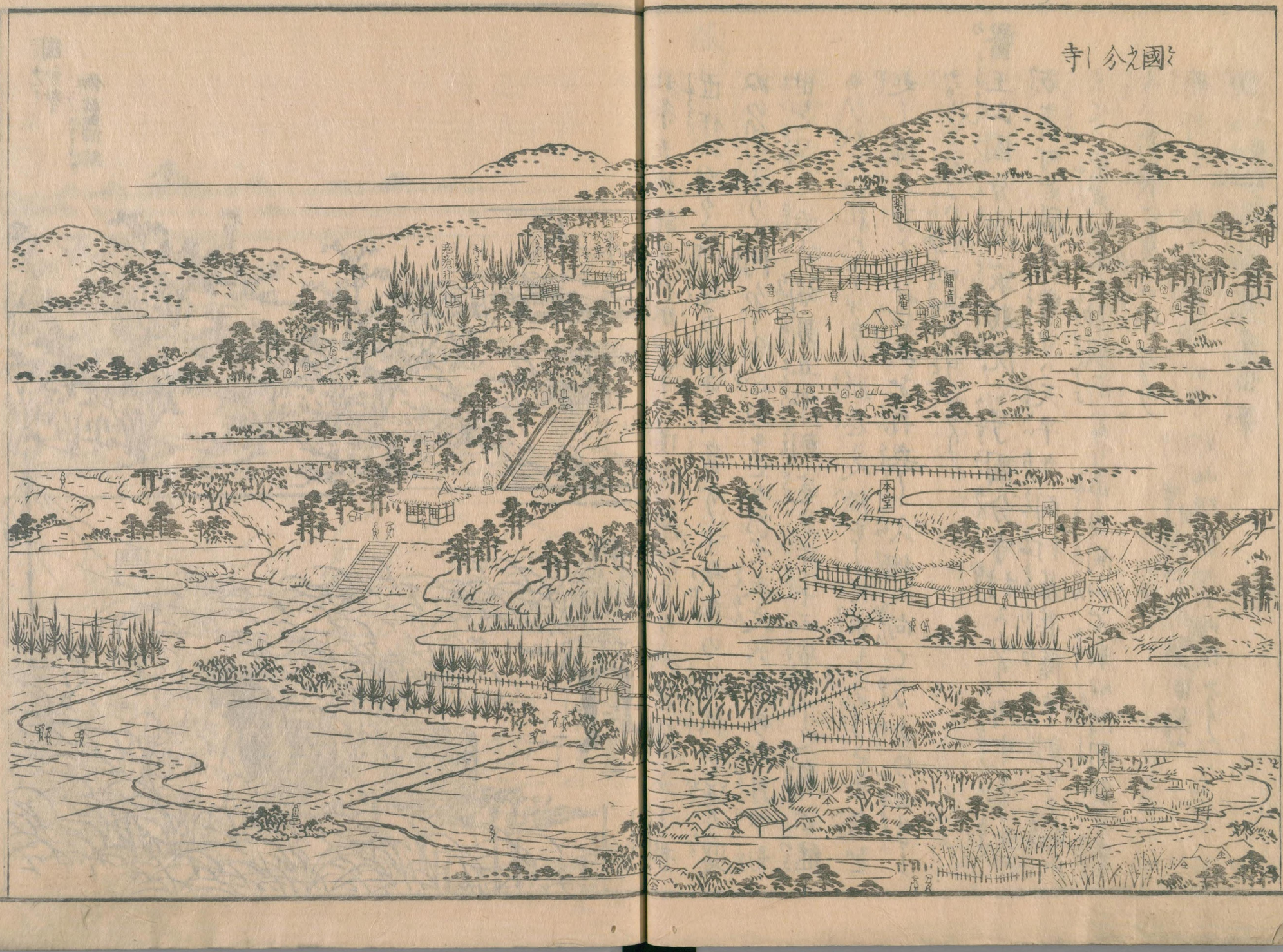
国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

上よ現ㇾ夢上人ㇾ容を摸ㇾ之衣木なり
然ゐ七月七日玉川ゐ靈木の流れ漂ゐ有ㇾ則是を以て藥師
佛三軀を彫刻ㇾ一軀を當社よ納む（餘二軀ハ下野國日光山及び出羽國よ有ㇾ之由）
叡聞ゐ達ㇾ給ふ　廢帝の御宇勅願所ゐ定られ浮岳山深
大寺と震翰を灑き扁額をゐ賜ふ又貞觀年間武藏國司藏
宗卿叛逆を叡山の惠亮和尚よ仰ㇾ乞乱賊降伏を祈らゐ
ゐ和尚當國の國分寺よ至ㇾ不動の利劒を虛空よ投ゐひ
賜ふ勝地を道場とせむと誓ひゐゐ遥ゐ眤て當寺井泉
の辺の石上よ賜ぬ此石を劒立の石と云依五大そを勸請ㇾ此
地ゐ於て祕法を修練せられゐ行力空ㇾ逆徒悉く降伏せり
依叡感のあり當寺を惠亮ゐ賜ひ此石ゐて七邑の地を寄附
なゐゐ（是を深大寺のと七邑と唱ふ）ちうあるゐより法相宗を摂ㇾ台宗ゐなり
なゐれ護國安民の祕法怠る事なく關東第一の密場と
なるより（昔ハ十二宇の坊頭ありそ大仏殿ゐ度ゐの兵火ゐさひく今ハ昔ゐ遥へり）
ㇾ淺野火の災に罹ㇾ灰燼と有ㇾ乍も惠亮家深く信ㇾ再ひ
堂宇を営ㇾ波平行安の刀ㇾを寄附す　（與銘長四尺五寸あり）
繪巻物　并詞書二巻　參議右中將藤原公尹卿筆
抑當寺ハ關東融通念佛最初弘通の道場ゐゐ慈眼
大師　大猷公の　上聞ゐ達ㇾ給ひ御諱を記させ給ひぬるゐ
受させ賜ひ忝も結緣の名帳ゐ御
當寺融通念佛の緣起ゐ詳なり（此念佛ハ大原の良忍上人現ゐ
ゐ此法や或ハ十返百返乃至千返万返を日課
他の人のゐとゐ他の人の唱ふる称名をハ自らの
平等ゐ修ㇾ功徳廣大無辺やゐて
天王ゐこの念仏の結像ゐ入ㇾ
深大寺蕎麥　當寺の名産とす題を
真とゐとゐの基少ㇾ今近隣の村里より産ㇾ
ㇾ都下よ称ㇾ佳品とす然れ
難波田彈正城址　深大寺大門松列樹の東の方の岡を云土人ゐ

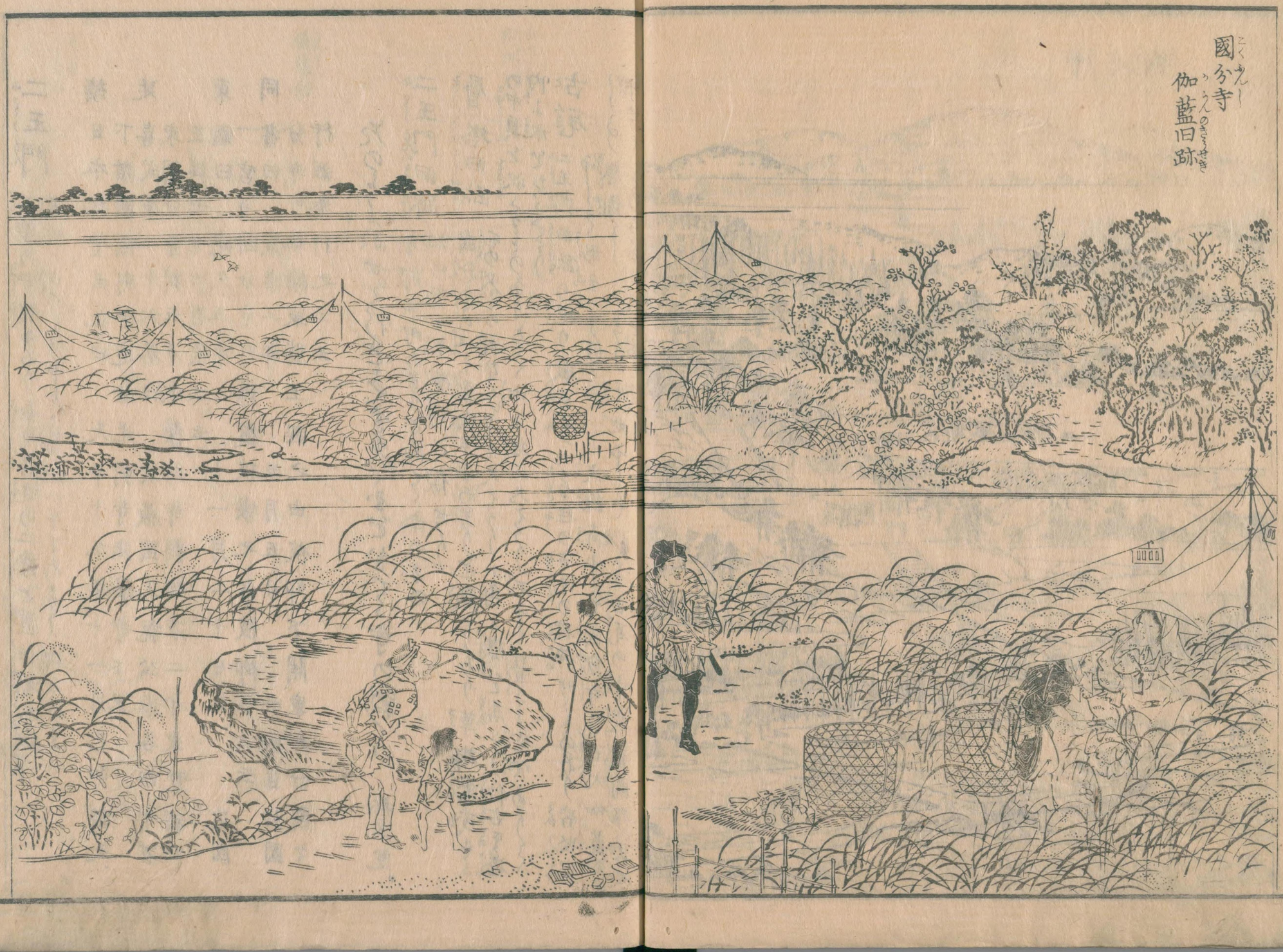
国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

城山と呼ぶ今ハ麥畑となるといへども此所彼所に湟池の形
残れり此地ハ往古　清和帝の御宇藏宗卿武藏國司
たりし時こゝに住せられたりし旧館の跡にして天文の頃上杉
朝定の家臣難波田彈正忠廣宗松山の城の出張としてこゝに
城廓を構へたりしとゝ
北條五代記曰く上杉修理太夫朝興の嫡男五郎朝定生年十三歳にして家を
継武州深大寺といへる古城を再興し北条氏綱に向ひ弓矢の企ありなり
といへる条下に此軍ハ天文六年七月廿日なり されハたけき中にやさしきありその旧のいくさ大れ
難波田あやなくうしろをみせ松山さして落ぬを北条方に山中主猛豹かけ
よせ一首ハかくそこゝろえける
あしかしよかれとてそたゝかひめると難波田のくつれ行うしむ
と俳諧躰によるけしに難波田もさすがよしなる武士にてくつたゝいさゝか引かへし
君をゑくあこしんをあらはしたゝ事の松山浪もこゝろなり事
我作りかほに古今集の哥をとりあつせく返答ありくいそかもしく弱のあしもやめて
ゑりぬかふさもありぬへし主君朝定を館に残し置難波田うたれなハ松山ハかなせくる
浪もこゝろぬへし身を全しく君につかふるを忠臣の法といふなり作者といひ功者といひ
うけひきしまゝる勇者とそこなく人中をへりき云々
深大寺城跡　深大寺佛堂の後の方の山續にして平間六七丁を
隔たり空堀或ハ柵門杯ありしと覚しき形今猶嚴然たり
北条五代記に大永四年の頃氏綱江戸の城を襲ふ上杉
匠作ハいまた河越の城に引籠り十余年の春秋を送り迎へ
ぬいけよりか例ならす心ちそこなひて天文六年の卯月下旬
世を早く去て嫡男五郎朝定生年十三歳にして家を継
ゐひぬていれハ七〻ヶ日の服忌さへ経まして道をあらため兵を
起し深大寺といふ古城を再興し氏綱へ向て弓矢の企ありなり
なりとあるハ則此所のことなり
醫王山國分寺　最勝院と号國分寺村にあり府中より北の
方十八町を隔り當寺ハ天平年間行基菩薩草創する所に
して　聖武天王の勅願所なり中興開山を教心阿闍梨と号
今ハ新義の真言宗なり
藥師堂　本尊藥師如来　脇士日光月光十二神将の像ハ共に開山行基大士の作なり
額　金光明四天王獲國之寺　深見玄岱筆




国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

# 國分寺 伽藍旧跡



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

二王門 石階の中腹にあり金剛密迹の二像を置作者未詳
堂林ハ古のことのゆして舊地ハ半丁あまり南にあり

續日本紀聖武紀曰 天平十九年十一月己卯詔天
下諸國國別令造金光明寺法華寺下畧
延喜式第二十六巻曰 武蔵國正税公廨各四十万
東國分寺料五万東藥師寺料四万二十東梵釋四
王料七千七百東云云
東鑑曰 建久五年十一月二十七日 近國
一宮并國分寺可修復破壊之旨被仰下云云
同書曰 寛喜三年五月五日 任綸旨於國
分寺可轉讀最勝王經之由被仰下開東御分國々
行然奉行之云云

たのことに世を行ひとて宮ゐて国を分てる寺の敬く 称名院

二王門旧跡 寺前半町あまりを隔てゝ南の方の
畑の中に其礎石を存せり

層塔旧跡 國分寺の少し東南半丁あまりを隔てゝあり草樹繁茂する
不の少しの岡なり方九尺なり六角に礎を居たり往古其塔
の中真を収ることのありとて中に径三尺なり石にて畳たる空穴ありて
内に水をたゝへたり

古瓦 二王門旧跡の辺り数百歩のある往の古瓦の破碎せるとのあり皆堅密
ゆしく形全かしほといへども文綵奇ゆして國分寺の古大伽藍なり
しるの想像りしたまへり其地ゆして切たる古瓦の中武蔵國郡の名を
印せしことのこゝに其形を挙て證とす

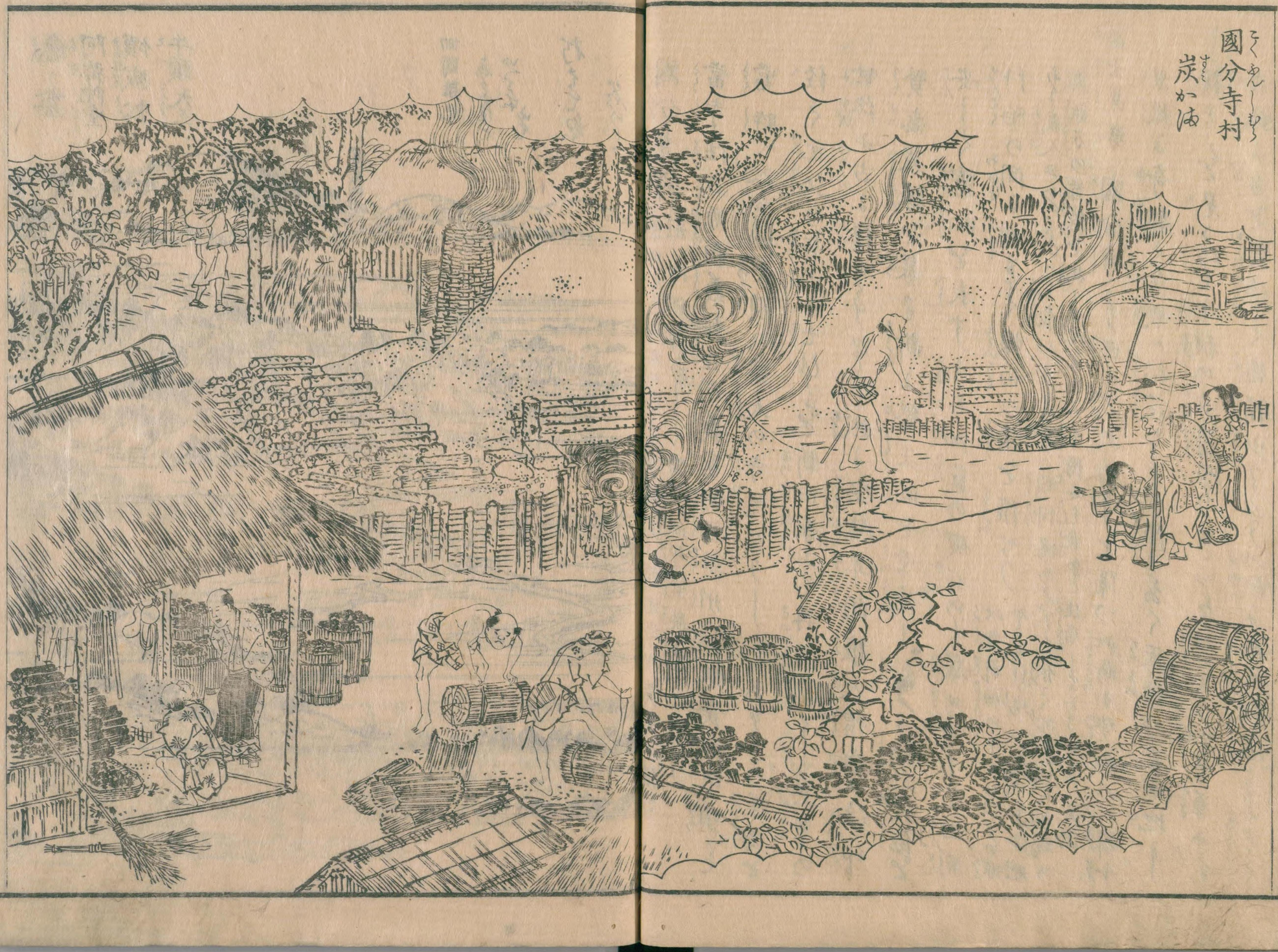
國分寺碑 藥師堂の前右の方にあり碑文ハ服元雄中英先生撰む書ハ河保壽にして當寺法印賢盛建るなり

當寺往古源頼義朝臣同義家朝臣奥州征伐發向の頃も當時へ入るひ其頃ハ盛大の寺院なりしと云あまたの星霜を経て元弘の兵火に亡ひしを新田家にて再興ありしも兵革の世終に古に復せるなし然に宝暦年間権大僧都法印賢盛衆縁を募て新に醫王閣を営建し侍る所の灵像を安して靈跡を表す今古伽藍の礎石のこ嚴然として田間阡陌の間に埋もて懐旧の情を催せり

此寺前畑の中にかつてい塚かうけ場なと字せる地あり或人云かつていハ乞食かうけ場ハ頸掛場なりしと依て按に古へ合戦の後敵方の首級を掛し地なるもハ其傍に乞食なと住居してありしなるん欤

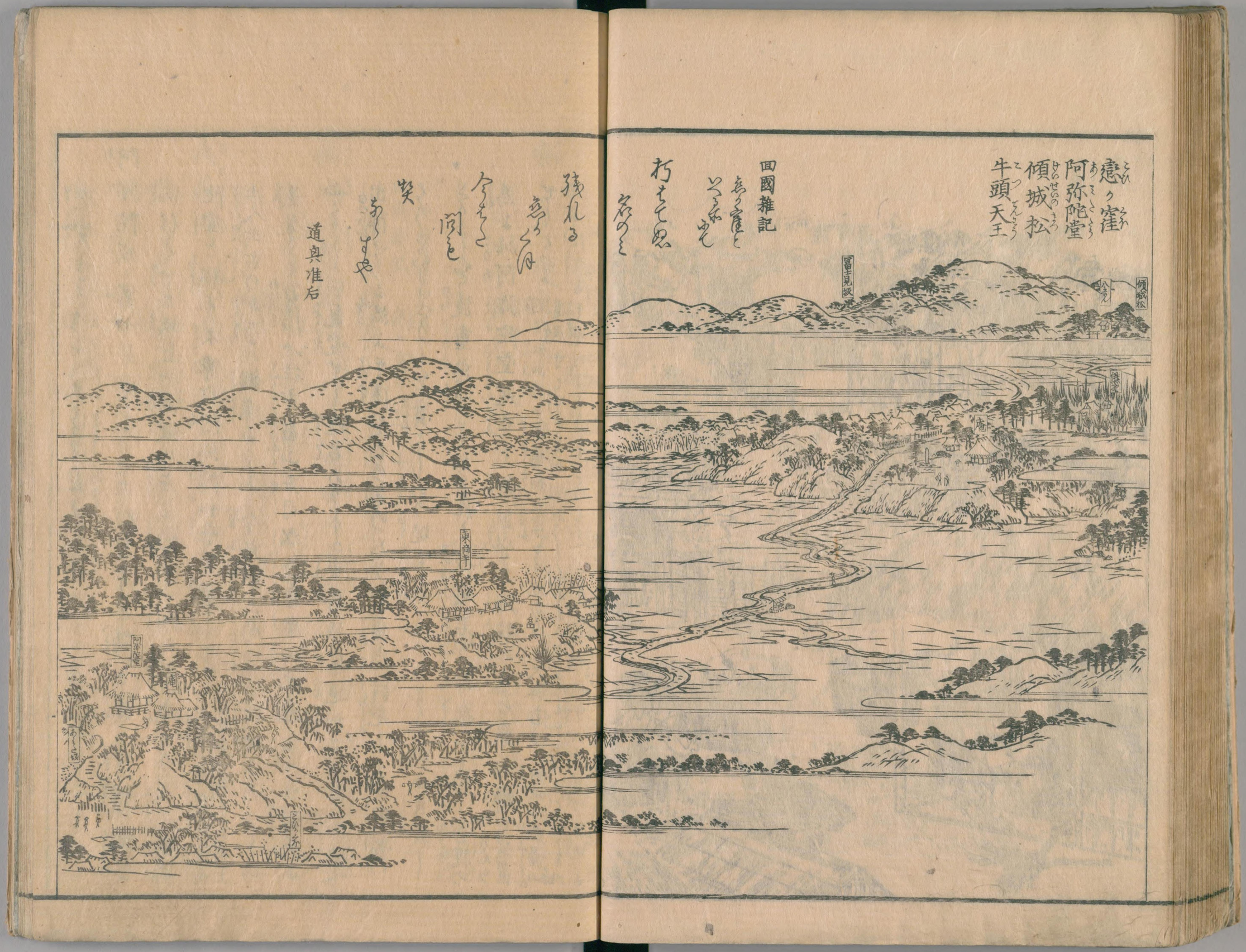
富士見塚 國分寺より西の方五町斗を隔つ此所に登れハ一瞬千里殊に奇観なり東ハ浩茫として限りなく天涯ハ地に接せるを見るのこ中秋の夕月のあきにて草より出て草に入の古詠に古を想像て感情少からす此故に幽人騒客ここに来て

# 國分寺村
# 炭か油



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用




国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

遊賞せり　三丈ばかりめぐり　五十歩あまりひろし

阿弥陀坂　冨士見塚より十三町あまりを隔てゝ窓ヶ窪村の地北へ向ひて下る坂を云此坂の左に傍たる岡に草庵あり土人阿弥陀堂と称す木像の阿弥陀如来を本尊とす　延享四年鶴心と云僧此草庵の廃たるを興す　土人云古の本尊ハ銅像にして今府中六所宮の社地にあるとの是なりとお傳ふ往古畠山庄司次郎重忠此地窓ヶ窪の驛舎にゆかりし頃寵愛せし遊君ありしが重忠平家追討につきて西國へ出陣せらる然に其後をこのものありて重忠討死したる由いひ伝へたりしを實としかの遊君歎きのあまり終に自殺したりしを後重忠ゆゑあれば彼遊君が節操を感し菩提の為に此阿弥陀堂建立し銕を以て弥陀ぬ来の像を鑄て安置せしといふ　因に云此地に道場畑と字する地あり土人云むかし此地に無量山道成寺と号する寺院ありしが此に志ゆ昌ふことそしるとこれは此阿弥陀堂も其境内にありしものなるべきなり又云今府中六所宮の社地にあるなるの銕像の弥陀佛ハ重忠愛せし遊君の菩提のゆゑ造立するなれ佛躰

なりといへども其佛像の銘文年号ホを考ふるに重忠とは時世大に違ひ誤なるなり所にけし猶六所宮の条下をみるべし

戀ヶ窪　同所坂より下の低き地をいふ古へ東奥北越ホの國々より京師及び鎌倉ホへ至るの驛路にて其頃ハ遊女の家居なりしかゝありしといへり　此地に牛頭天王の叢祠あり竹林の中に凹なる地あるを古への北國街道の旧址なりといへり

田國雜記　恋ヶ窪といへるなれば

朽たてぬ名のミ殘れる恋ヶ窪今ことゝはちきりなりけや　道奥准后

傾城ヶ松　同所艮の方八幡宮の社地にあり同し程の古松二株雙立せり土人重忠ヶ愛せし遊君の塚印の松なりといひ傳ふ然れども社地なるものは此八幡宮の神樹なるべし

武蔵野　南ハ多磨川北ハ荒川東ハ隅田川西ハ大嶽秩父根を限として多磨橘樹都筑荏原豊島足立新座高麗比企入間等をへて十郡に跨る草より出て草に入又草の枕に旅寝れ日數を忘れ向へき里の遥なり抔代々の歌人袂をしぼりしが

御入國の頃より昔に引かへ十萬戸の炊煙紫霞とも棚引
僅に其旧跡の残りしも兼應より享保に至る四度迄新田
開發ありて耕田林園となり往古の風光これなしされと月夜
狹山に登りて四隣を顧望するとは曠野蒼茫千里無限
往古の状を想像するにたまり　狹山ハ第四巻の中に入しり

萬葉十四東歌

武蔵野爾宇良敝可多也伎麻左氐爾毛乃良奴伎
美我名宇良爾低爾家里
武蔵野乃乎具奇我吉藝志多知和可禮伊爾之與
比欲利世呂爾安波奈布與
古非思家波素氐毛布良武乎牟射志野乃宇家良
我波奈乃伊呂爾豆奈由米
伊可爾思氐古非波可伊毛爾武蔵野乃宇家良我
波奈乃伊呂爾低受安良牟
武蔵野乃久佐波母呂武吉可毛可久母伎美我麻
爾末爾吾者余利爾思乎
和我世故乎安杼可母伊波武牟射志野乃宇家良
我波奈乃登吉奈伎母能乎

新古今
[illegible]　摂政大政大臣

續古今
むさしのハ月の入るさしもなし屋ぶう末にかゝる[illegible]　通方

玉葉
旅人の行かたくにふきまけて[illegible]むさしの[illegible]　右大臣

續千載
むさしのハ[illegible]　[illegible]

續後拾遺
[illegible]　家隆

新續古今
むさしのゝ[illegible]　定家

千五百番哥合
[illegible]　雅経

夫木
花のさかり過ぎし妻恋ひかねん一もと薄のむさしの丶原　為實

回國雜記
むさし野やゆきて残月をみつゝ
ひきしほの入江の野、の郷　道興准后

桂林集
むさし野に長陣せし時やどりき人を思ひて
むさしの八千種も見えし時なる露草を草に結ぶらん　直朝

武蔵野紀行
天文十五年仲秋の頃むさし野を見んとて出にけり。こゝかしこかゝるところありけれバ人くらかわまでむさしのゝ中にてしられて中路にかゝり。とともあまた八千種のむさし野の露にやどりける。のの錦もあさちにとめる月のかげ。露のまに見えける
むさし野をいづくをさして分け入らん行くも帰るも果しなけれバ　氏康
いかにしてこの野の面をながめけむいつしかゆくかたは花
むさし野のひとのこゝろもあやし
なかなかに我世の中に人のあれば見るも恋しき此野のいちもと　同

武蔵野の古哥ハ萬葉集をはじめとし代々の撰集並に餘哥合および家々の集等にあまた見えたれどもその其數あまたなれバ校擧にいとまあらず。たゞ世に耳なれたるもの二三を記しはべるのミ

武蔵野翁　翁ハ其郷姓詳らかならず。郁芳門院の一﨟士と云。院崩ずるの後齢二十九にして世を遁て諸國を遊歴し此に止る菴を結び月に臥して武蔵野の廣を愛す。六十年を經て西行法師に邂逅し一宿を投して通宵古を談じ涙を緇衲に灑き曉に追て別る　續扶桑隱逸傳の文意をとる

西行物語　さしていづくを心ざすともなければ月の光にさそはれて武蔵野に分け入りて、むさし野の紫のゆかりをたづね、ゆくゆく草の原をわけゆけば、こゝかしこにすゝきが中に小萩がもとの虫の音も心ぼそく、野の末の庵のかたに煙のたつをあやしと見れば、人里ハ遠くして五六町ばかり入りて見れば、いとあはれなる庵のうちに八十ばかりの翁ひとり、経をよみてありけり。秋の草花ども折りて仏にそなへ、庵のうへをふきてかけたり。ありし世の人の心にも似ず、霞をかけて住みける。八軸を誦して経を読みて念仏する。ことの心をとひければ、昔ハ郁芳門院の侍にて候ひしが、院かくれさせ給ひて後、この野に来りて九十有余の齢をおくり侍る。仙人のごとく心をすましてあるなり。修攝其心と申すは是なり。八月十五夜名におふ月のかげまことにいみじくてもまうづる

[illegible]

紫草　武蔵野の景物とす和名類聚抄無良散岐と訓す

紫ハ最上の色にして古歌にも兎の色又位の色抔詠あれせ
ゝり根を碎て染る所に紫の根染又紫の根摺ともいへり女に
比しては縁の色抔もいへり江戸の紫染ハ最絶妙にして他邦に
比類なし故に江戸むらさきの称あり

延喜式　内蔵寮式曰
紫草二萬二百斤武蔵國信濃國二千八百斤云云
同　書曰　民部省式曰
紫草三千三百斤云云

古今　紫の一本ゆへに武蔵野の草ハこゝろあれとそゝる　よみ人しらず

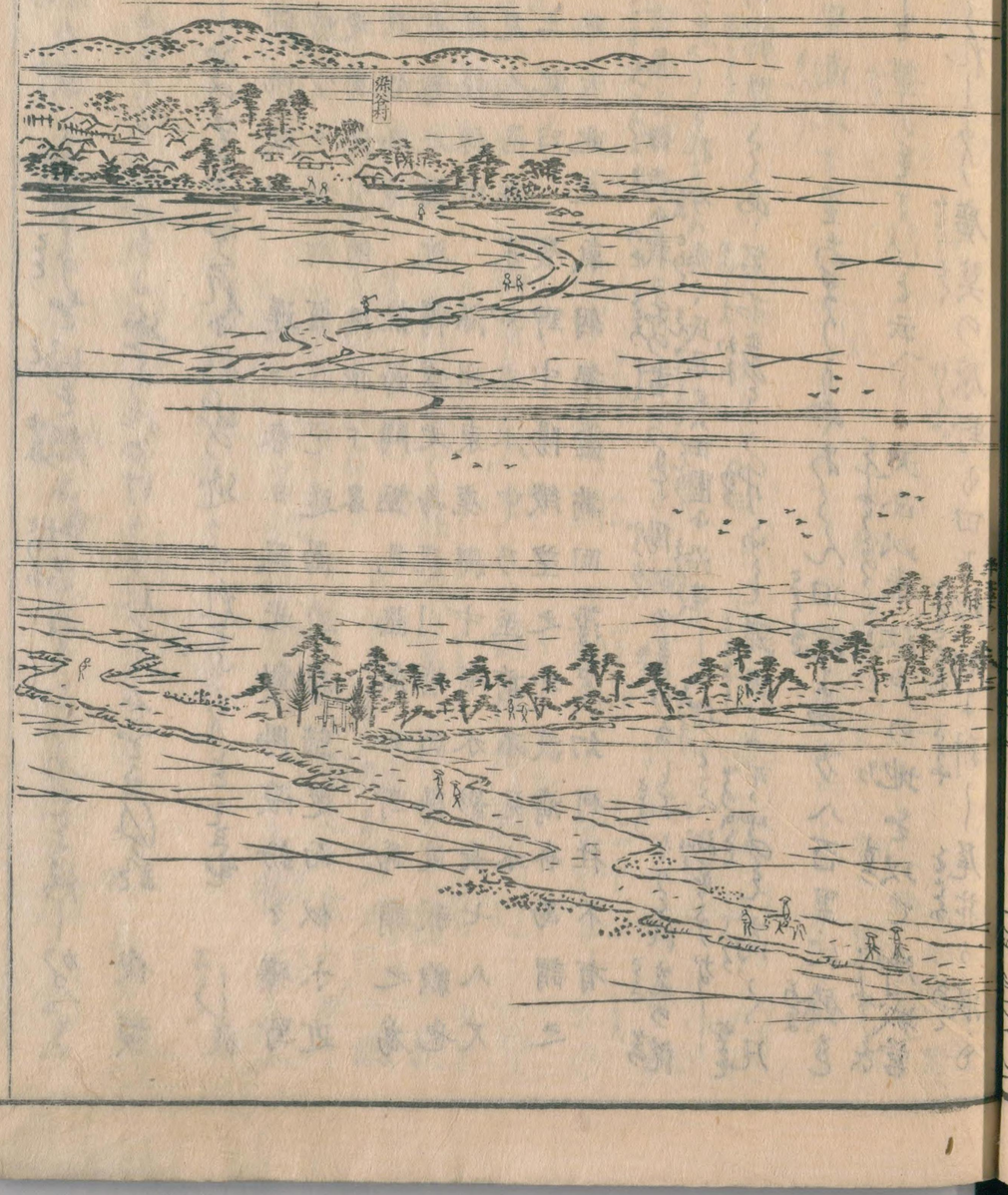
後撰　むさし野ハ紅の花にしたりけしうとゝの草を見てひにさ　同

新勅撰　武蔵野の草をみけて摘初しその葉の色ハかきりう　九条右大臣

續古今　むさし野に生とし草ハ紫の色ゆへにもむつほし　小町

逃水　武蔵野の景物なり里老云く仲秋の末霖雨の頃此
野を行に凹なる所に水湛へて通ひたし此所に除彼所にさけて
行に道も定なし草根沼のめし故に往来の人吟呻歩行を云と
此説信とするに足さるへし或云天日快明の時曠野陽焔の事に
よりて遠く望めハ草の葉末の風に靡ら水の流るゝめくゝ見ゆるを
いふ依て所と地に辺へ至れとも素水流あるにあらさるハ

府中
八そう
八幡宮



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

終ふる水の原より至るを名とふ此名ありといへどもそよ詠ふありといへる迎ふれども
夫木　俊頼

同　むさしのゝ草のゆかりのおひ初の迎ふれども

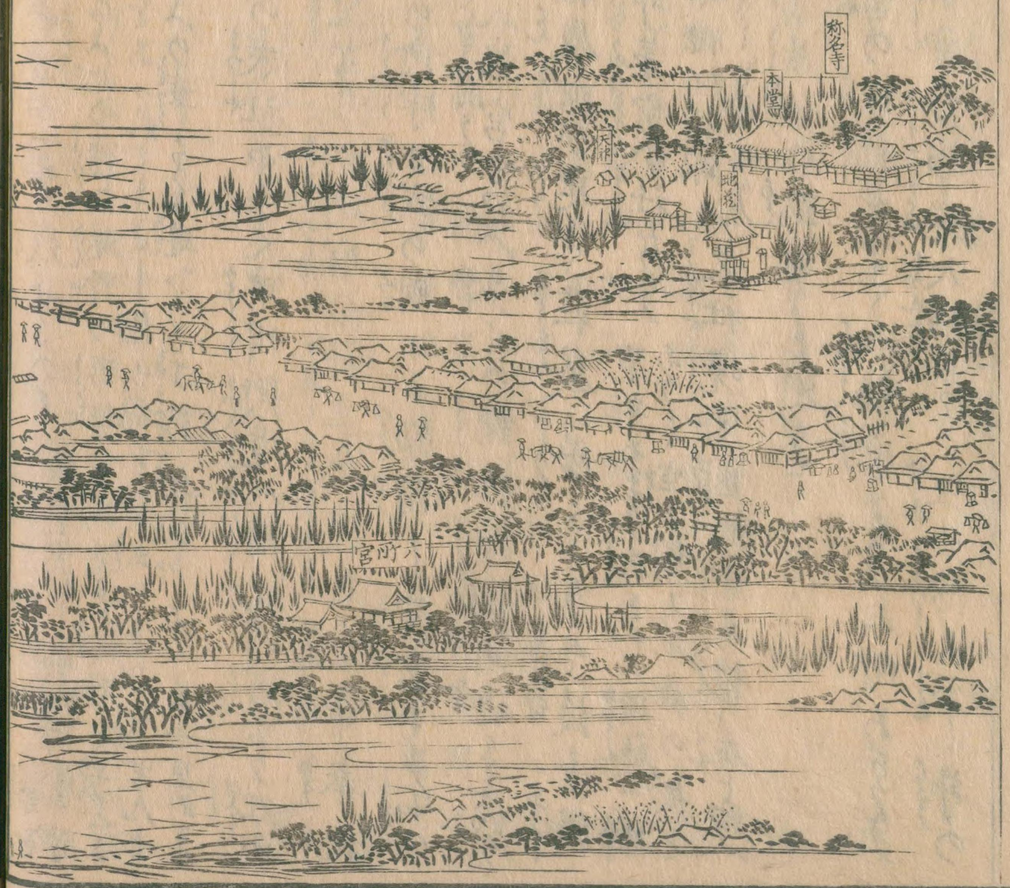
性靈集詠陽燄喻　遥々春日風光動陽燄紛々曠野飛舉體空々無所有狂兒迷渴遂忘歸遠而似水近
唐　陸勲志怪録曰　水疾走趣之轉近轉滅走馬流川皆謂陽炎狀貌也
遥望見人馬往來如在水中乃至前不見水
周　運敞註智論曰　飢渴問極深州東鹿縣中有水影長七八尺
慶風土記曰　廣野中陽燄如馬流川皆謂陽炎狀貌也
水影此天地之氣網縕盪濶回薄変幻何往不有

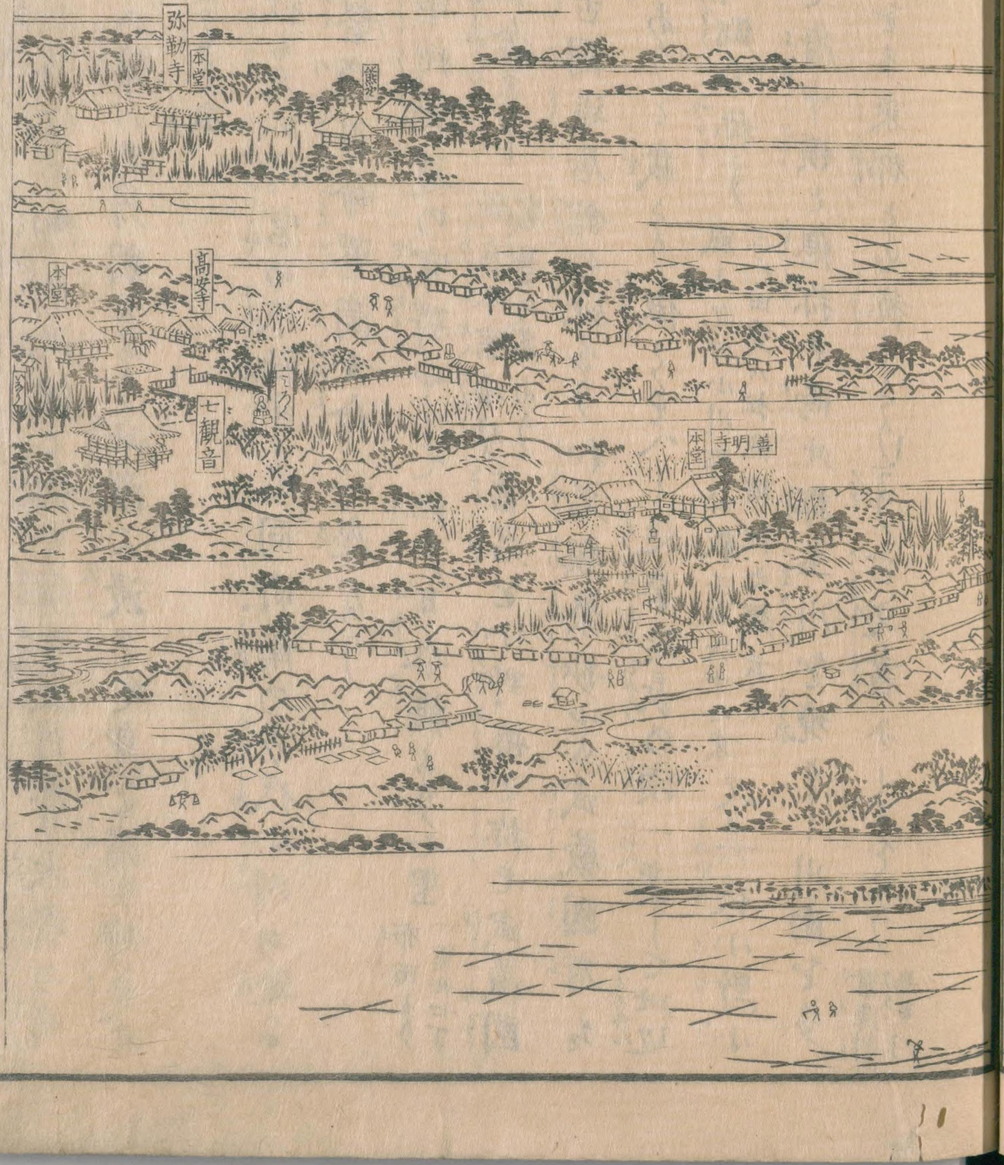
武蔵野の勝槩ゝや名ふ
按ふ性靈集を録前ゝ我ゝ和の書いつもも陽燄の譬ふ沿草ゝ俗ゝ先の説
ゆゑんあらんかゝれより民居又ハ田園ゝ沿草ゝ俗ゝ先の説
東西十三里南北十里あまりやあらん旧記ゝ四方八百里に餘ると
書ふ筆のすさひと云へゝ天正以来江戸の地を以て御城営
ふ定さやれゝより廣莫の原野も田ゝ鋤畑ゝ耕ゝ尾花ゝ浪も
民家林薮ゝ沿草ゝて万ゝ一を残せるのゝ
新田開発ふより下宿とゝ地の傍ゝ原野の形勢を残されゝ頻北武蔵野
ふ那ゝ中秋の頃虫情をきゝふの葦ゝ千種の花を愛虫の音を賞せんと
遊へゝ程江戸ゝより十里あまり

## 八幡宮　府中六所宮の末社ゝ

あり祭ふ　應神天皇なり　六所宮の神主猿渡氏兼帯奉祀
す相傳　聖武天皇の御宇日域の國ゝよ勸請ゝ営宮ゝ私の
ゝの皆是八幡宮とゝ多ゝ八幡村の八幡宮とゝ總社神祠の近ゝ
當社も古ハ本社禮殿並ひ建ゝ莊嚴湯ゝゝり平後ゝ漸ゝ
衰敝ゝ遂ひ今ハ即茅宮小社なり　平年あまり前ゝハ老杉一株
暴風ふ吹おゝ今ハ空ゝ聳え千歳の徴と
地名あり古の宮守居住の跡ふ
瀧の社　當社も六所宮の末社ゝ
東南の方ふあり祭神倉稻魂大神なり　八幡宮より三町あまり
社の傍ゝ少ゝ斗の

府中
称名寺
弥勒寺
善明寺
高安寺




国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

飛泉あり六所宮の御手洗池と称す毎年五月五日大祭の時
神幸供奉の輩ハ五月朔日より此瀧に浸まて身を清め神事に
たつさはるまと云

石塚社　當社も又六所宮の末社にして同所南の方代小川の辺に
あり祭神磐筒男命磐筒女命二座なり

府中驛舍　甲州街道の官驛にして江戸日本橋より七里（布田より一里廿七丁日野へ二里八丁あり）旅舍多し（新宿本宿番場宿等の名あり）舊名を小野縣と称す武蔵國
府にして上古國造居館の地なり和名類聚抄にも武蔵國府を
多麻郡にありと載たり徴とすへし延喜延長の頃一変して此辺
すへて小川郷と称す（風土記曰小川郷公穀二百六十七束三毛田貢ハ松桃鞍靴之類云々）又其後小野小
川の称止て府中領と總称す尚此郡玉川を境とし川南を多
西郡川北を多東郡とも称したり古文書にこれたり（常陸對馬長門越前越後皆府中と称せり）

124
20
114

国立国会図書館　　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

ガラス使用
国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114